

「ハツハ、、、」
威丈高になつて、おどしつけるやうにいふた、幕吏の大喝に對して、嘉兵衛の報みたのが、哄笑一番。笑はれた役人の顔色は、急にけはしくなつた。

「何が、可笑しいか」

「別に可笑しい、といふほどのこともねえのですが、笑ひやした」

「何故、笑ふた」

「こりやア、御無理でせう。生きて居る人間ですから、笑ふこともあれば、泣くこともある。それを、一々咎められ

ては、迷惑千萬だ」

「拙者が、同道いたせと申したら、貴様は、笑つたではないか」

「へい」

「何が、へいだ」

「へい」

「さ、一しよにまゐれ」

と、いひつゝ、嘉兵衛の肩へ、手をかけた。

「何を、爲るんだ」

嘉兵衛は、その手を拂つた。

「さては、手向ひいたすか」

「お手向ひは、いたしやせん」

「今、手向ひいたしたては、ないか」

「行くとも、行かねえとも、未だいつて居ねえのに、手をかけるから、拂つた丈けのことだ」

「それが、手向ひぢや」

「ハツハ、、、」

「また、笑つたな」

「どこまでも、役人を莫迦にして居る、といった態度である。」

「まゐれ」

「どういふ御用筋ですか、それを聞かせて下せえ」

「左様なことは、申すに及ばぬ。一しよにまゐれば、解ることぢや」

「一しよに行けば解るでせう。けれども、一しよに行くには、どういふ筋合で、つれて行かれるのか、それを聞いて見てえのだ」

「それは、いへぬ」

「いはなけりア、行かねえ迄の事だ」

「何と、申すか」

「御用筋が解らなけりやア、誰れにしたツて、行き難いものだ」

「彼是れ、拒むに於ては、繩にかけても連れてゆくぞ」

「そりやア、御勝手です」

「勝手にいたせ、と申すのか」

「左様ではねえが、勝手に連れて行くのは、しようがねえのだ。どうしても、行かねえとは、いつて居ねえが、御用筋を聞かせねえで、理不盡に連れて行くのは、そつちが悪い、といふ丈けのことで、悪くても連れて行く、といふ

のぢやア、しようがねえ」
 「船乗りのくせに、よく理窟を捏る奴ぢや」
 「船乗りでも人間ですから、いひたい丈けのことは、いつて退けるのだ。旦那の御名前は、何とおつしやるのですか」
 「拙者は、勘定方高橋三平配下、三橋藤右衛門と申すものぢや」
 「へへー、高橋様の御手附でしたか」
 「左様ぢや」
 「高橋様は、物解りのする旦那と、聞いて居たが、あんたは、解らねえ人だ」
 「無禮な事を申すと、ゆるさぬぞ」
 「別に、御無禮は申しませんが、解らねえ人だから、解らねえといった丈けの事だ。わたくしの聞いて居るのは、どういふ御用筋ですか、といつて居る丈けて、理窟を捏て居るのぢやアねえ。この船に、御不審があるから来い、といふのか、それともに、わたくしの身分に、疑ひがあるから来いとか、只だ一言丈け、伺つて置けば、それでいいのだ。この船を持つて、永い間の航海に、只の一度も、こんな事に出會つたことがねえから、それで、變に思つて、聞いて居るのに、それには、何ともいはねえて、頭からおどしてかゝられぢやア、虫のせいで、何とかいひ度くも、なるぢやアねえか」

「よし、申して聞かせる。船にも、人間にも、御不審の次第が、あるのぢや」
 「なる程……」
 「ます／＼落付いて、嘉兵衛は、考へて居た。
 始終の状況を、見て居た。お北を始め、船夫一同は、ひどく心配になつて來た。
 「そんなに、剛情を張らないで、ちよつと、行つて來たら、どうです」

「御不審を、うける覚えはわえが、斯ういはれぢやア、行く外はあるめえ」
 「藤右衛門は、配下のものへ目付きて、それと知らせた。
 バラ／＼と駈け寄つて、嘉兵衛へ、繩をかけようとした。
 嘉兵衛は、ニヤリと笑つて、
 「さア、縛つてくれ」
 今迄の強辯に對して、癪にさはつて居るから、繩はかけさせたけれど、手は自由にして、腰へかけた丈けである。

九

昔も今も、さらに變らないのが、役人根性である。
 二た言目には、役人風を吹かして、威張り散らすのを、丸で役徳の如く心得、規則を楯に尊大振つて、人民を、塵芥のやうに取扱ふ奴があつたものだ。
 昨今の時世になつても、猶且つ少なからず、左様した役人のある所から、考へて見ると、武家政治の時代には、どれほど威張つたものか、判らない。
 有體にいへば、日本位、役人の威張る國は、世間のどこにもあるまい、と思ふほど、役人の國である。
 官廳の役人ばかりでなく、會社銀行に、居るもの迄が、何となく反ツ繰り返つて、鼻持ちのならぬ輩が、却々に多い。
 若い人達が、學校に居る時から、役人を心がけるのも、實は威張り度いが、勢一ぱいの望みて、それが外れたら、會社銀行へ落込んでゆかう、といふやうなものが、多く居るのだから、實に驚き入る。
 役人になつて、威張り度い、といふ間違つた考へと、役人は偉いものだから、無理な事でも、その命令には、服従

す可きものだ、といふ奴隷根性と、此二つを、日本人の頭から、取除いてしまはねば、將來の日本國は、大きくなり得ぬであらう。

舊幕時代の役人が、無性に威張つたのは、支那の眞似をしたのと、もう一つは、武家に、無上の權力を、與へて置いた爲めであつた。これが、長くつゞいて居たので、習ひ性となつて、今日に至つたものと、見る可きである。

ちよつと、用事があつて、人民を呼出すにしても、罪人扱ひにしなければ、何となく、虫の收まらぬ、といった遣方であるから、贍玉の太いものは、どうかすると、それに反抗したくなるのは、尤も千萬である。

三橋藤右衛門に對する、嘉兵衛の態度が、則ち其れであつた。抗辯はするが、手向ひはしないのであるから、ひどい目に、逢はすことは出来ない。只だ腰に繩をつけて、連れてゆく丈の事であつた。

人の體に、繩をかけるといふのが、抑々此上もなき侮辱であつて、頭の一つや二つ叩かれても、繩にかけられるほどに、侮辱とは思はれぬが、罪の無いものに、繩をかけてゆく、といふのは、無法の頂上であるが、その頃の事としては、或は當然であつた、かも知れぬ。

幕府から特派されて、函館の役所に詰めて居る、高橋三平の勢力は、實に大したものであつた。

幕前の殿様も、昨今では、頗る威光が薄くなつて、幕府の小役人にさへ、遠慮勝ちである位だから、一般の人民が、幕吏を、恐れることは、一と通りでなかつた。

況して、其長になつて居るのだから、高橋三平に對する、尊敬の態度といふものは、丸て神様の前にも、出た時のやうであつた。

けれども、三平は、年頃も五十餘りで、物事に理解のある、極くおとなしい人物であつた。

武藝の嗜みも一と通りはあつて、讀書の力は、相當に有つて居た。人に對する應接も、しつとりと持ちかける方で、談判事は、最も得意とする所であつた。

長上の人が、左様したや、さし味のある人物でも、部下の役人は、それづくに癖があつた。高橋のやうに、ぶつきら棒な奴もあるのだから、人間の事は、實に面白いものだ。

『遅くなりました』

と、いつて、藤右衛門は、高橋の前へ来て、丁寧會釋した。

『オー、御苦勞であつた』

『仰せに従ひ、嘉兵衛は、召捕れました』

『人の噂には、却々のしつかり者と聞いて居るが、よく素順に參つたな』

『思つたよりか、しぶとい奴で、彼是れ小理窟をいふて、容易に立ちさうもないので、繩をかけて引つ立てまゐりました』

『多ッ、繩をかけて……』

高橋は、意外に思つたものか、眉を寄せて、藤右衛門を、ぢつと見詰めた。

『何か舊惡でもあるらしく、しきりに出漕つて居たのを、無理に連れて來たのでありますが、どうも、迂散臭い奴です』

無頓着に、前後の思慮もなく、ペラ／＼と、しゃべり立てるのを、苦々しく思ひ乍ら、高橋は、黙つて聞き流すやうにして居た。

『よく判つた。もう宜しい』

と、軽く藤右衛門を押へて、

『繩を解いて、とに角、これへ連れて來なさい』

『はッ』

藤右衛門は、少し拍子抜けの態で、面目悪さうにして、立ち上つた。

それを、見送る、高橋の顔には、不快の色が、現れて居た。

一〇

嘉兵衛は、藤右衛門の跡に従いて、高橋の前へ出た。

「それに、控へろ」

と、藤右衛門の語氣は、どこ迄も、權柄づくであつた。

「これなる者が、嘉兵衛で御座います」

高橋に對しては、極めて丁寧に、口を開く容子が、いかにもわざとらしくて、俗吏の根性が、まさしくと、現はれて居た。

高橋は、只だ軽く、首肯した丈で、すぐ嘉兵衛の方へ向いた。

「其方が、嘉兵衛であるか」

「へい」

「今日は、強て連れまゐつて、さぞ不満のことも、あつたであらうが、拙者の詞が、足らなかつたのぢや。どうか、ゆるしてくれ」

是れは、又、意外千萬であつた。嘉兵衛は、思はず頭を下げたが、藤右衛門は、頗る面目か、悪かつたらしく、そつと汗を拭いた。

「其方の持船は、那の一隻であるか」

「左様で、御座えます」

「三百石積ぢやな」

「へい」

「其方の生れは……」

「淡路で御座えやすが、國を出て、もう五六年になりやす」

「初めからの船乗りか」

「へい」

「父も、左様か」

「へい」

「那れ丈けの船持ちに相成るには、相當の資力を要するが、その邊の儀は、巨細に申述べることが出来るか、どうぢや」

「わたくしの力で、造つた船ぢやアねえのです」

「ふふーむ、而て其事情は……」

「貰つたのです」

「船は貰つたのぢや、と申すか」

「へい」

いかにも、無難作な、いひやうで、高橋は、少し不審に思つた。

嘉兵衛は、それから兵庫屋の事を、一通り語つて、更に津の國屋との關係も、明かに述べた。さすがに、權右衛門を、打殺した一條だけは、いひ得なかつたが、外の事は、一切打明けて、はつきりと答へた。

蝦夷の探險に、深い志があつて、津の國屋の相談に應じた、といふ事情が、すべて判つたから、高橋は、嘉兵衛の志しに感ずると共に、たとへ、一時の場合にもせよ、斯うした立派な男に、悪い疑ひをかけたのを、まことに氣

の毒に思つた。

實は、嘉兵衛に對して、海賊の密訴があつて、深く信じた譯ではないが、訴へがあつて見ると、一應は、取調べる必要があり、内々さぐつて見たら、嘉兵衛の人物に、普通の船乗りと、異なる所もあるので、或は、いづれかの武士が、何等かの事情に因つて、斯うした稼業に、かくれて居るのでないか、とも思つたから、兎に角、しらべて見よう、と考へて、藤右衛門に、嘉兵衛を、連れて來い、と、命じたのであつた。

『それにて、其方の身性も判り、船の事も、一切明かになつた。この上の調べは、いたさぬが、其方は、この先きも、船乗りをつゞけるので、あらうな』

『蝦夷の奥地から、國後の方へ迄、一度は行つて見てえ、と思つて居りやすから、この船乗りは、わたくしの生涯の稼業になる、と思つて居りやす』

『まことに、心地よいことを聞く。よし、此上は、渡海の自由を得るやうに、いたして遣はさう』

『へい』

高橋は、すぐに奥へはいつて、しばらくすると、出て來た。

『改めて、之れを遣はす』

と、いつて、一枚の書附を出した。

それには、斯ういふことが、書いてあつた。

一、蝦夷地一帯の沿岸、渡航の儀相許し候事

一、出羽酒田より函館松前に到る、産物運送の御用申付け候事

嘉兵衛は、雀躍せんばかりにして、喜んだ。

『今迄に、例のない取扱ひぢや。公儀の御恩に感じたら、この上とも、蝦夷奥地の儀については、懸命の力を盡さな

ければ、相成らぬぞ』

『有難う、存じやす』

藤右衛門は、いよく面目玉をつぶして、恐れ入つて居た。

それから後は、高橋の愛顧が加はるばかりで、嘉兵衛は、渡航の上に、少なからぬ便を得た。

従つて、津の國屋の計劃にも、頗る好都合の事が多く、有望に漁場を、手に入れて、澤山の人を、大阪から送りつ

けて來た。

寛政十年の暮、嘉兵衛は、多くの積荷をして、江戸へ出て來た。その時が、幕府の、擇捉探險に就て、船夫の募集

を、公にした際であつた。

重藏と嘉兵衛

一

品川の沖へ、怪しい船が、停まつて居る、といふので、それが評判になつて、船方の役人が、取調べの爲め、ふみ込んで、一應の調べをして見ると、意外千萬にも、函館出張の勘定方、高橋三平の署名した、出羽酒田港より、松前迄の産物運送を申付ける、といふ免状を、持つて居たのみならず、今度の入港は、高橋から、公儀へ對し、何事かの上申をする、大切な書面を、持つて來たのだ。といふ事も判つたので、調方の役人も、頗る恐縮の態であつた。

「斯様に明白な、御用を持つて居る船を、たとへ一時にもせよ、疑ふたのは申分のない事であつた。無禮の段は、ゆるして貰ひ度い」

と、まことに、丁寧な挨拶であつた。

「どういたしまして、疑はれるのは私の方に、却て落度があつたから、御手数をかけて、相すみません」

「高田屋嘉兵衛と、いはツしやるのか」

「へー、左様で御座えやす」

此時には、もう高田屋と、稱して居た。

「蝦夷地のことには、大分くはしいやうであるが、全く左様か」

「別に、くはしいといふほどの事は、ありませんが、函館や松前へ、たび／＼出入りをするので、聞き覚えて、少しは知つて居りますが、未だ奥の方へは、一度も、はいつたことがねえので、實地に知つて居る、といふのでは、ねえのです」

「此地とは、人情風俗も違つて、さぞ面白い事が、多いであらうな」

「物見遊山に、行くのと違つて、別に面白い事といつては、何もありませんが、まア人様の知らねえ所を、見て來られるのが、役徳とていひやせうかね、ハツハ、、、」

「松前侯の評判は、どうぢやな」

「そんなことは、とても判らねえが、あんまり評判は、いゝ方ぢやアねえ」

「どういふ風に、評判が良くないか、それを、知つて居るか」

「私ア、お上の密偵ぢやアねえから、よくは知らねえけれど、松前様の遣方は、まア火の番位のものでせうね」

「ははア、火の番と、同じか」

「へー」

「どういふ、理由か」

「何か始まりやア、騒ぎ出して、何もなけりやア、ちつとして居るのですから、火の番のやうなものでせう、ハツ、、、」

「なる程」

「一と口に、蝦夷といつても廣い土地で、お手入れの仕やうでは、日本の實にもならう、といふ大した土地ですが、松前様は、そんなことに、少しも構はねえて、奥地の方は、何でも滅茶苦茶だつて事を、聞いて居ますが、今のう

ちは何とかしねえと、ロシアの毛唐人達に、勝手な事をされて、上げも下げもならねえやうに、なりやアしねえかと、思つて居やす」

「ロシアか、ふふむ」

「エトロフや、ウルツプの方は、もう大分ロシア人の手が、はいつて居る、といふことです」

「その點については、公儀に於ても、頗る御心配なされて、それ／＼手を付けられる、といふことぢや」

「へへー、今頃になつて考へついたのですか、ゆつくりしたものですな」

「これツ……」

役人は、嘉兵衛の詞を遮つて、

「公儀の御政道を、是非しては宜しくない。たとへ、蔭口でも、左様な事を、いふてはならぬ」

人民に、言論の自由はなく、政道に對して、彼是れ批評がましいことをいへば、すぐに首の飛ぶ、時代であつた。

嘉兵衛が、今いふた程度の事でも、表沙汰になれば、安からぬ事として、取扱はれるほどであつた。それを、素直

に聞いて居た、役人も、ひどく叱られるのであるから、之れを制したのは、無理のない事だ。

「昨今では、公儀に於かせられても、いよく蝦夷地へ、直接のお手入れ、といふ事に決して、近いうちには役方の

人々は、出張せられる運びに、なつて居るのぢや」

「左様でしたか……」

「それについて、船方入夫の募集をして居るのだが、誰れ一人として、應ずるものがないらしいので、弱つて居られ

る、といふ事も、聞いて居るのぢやが、そんな事で、御出張の日の延びるのは、公儀の御威光にもかゝる、とい

ふので、大分焦つて居られるやうぢやよ」

不問語りに聞いた、船方入夫募集の一條に、嘉兵衛は、思はず膝を進めた。

「旦那ツ」

と、叫ぶやうにいつて、

「そりやア、本統の事ですか」

「嘘をいふものか、本統の事ぢや」

「へー、左様ですか」

「どうしたのか」

「イヤ、どうもしねえが、あんまり嬉しかつたんで、思はず大きな聲を出したのです」

「何が、嬉しいのか」

「是非行きてえ、と思つて居て、その手掛りがねえので、弱つて居たところへ、そんなことを聞いたので、胸が動悸

動悸するほど、嬉しくなつちやつたのです」

「はア、お前が、その募集に應じやう、といふのか」

「左様なんです」

「それは大い奮發だな」

「斯んな有難い御沙汰に、お受けをするものがねえのは、どういふ理由でせう」

「何しろ、ロシア人が、澤山に来て居る、といふところへ、行くのではあるし、それに、北海の風波を冒して、エ

トロフやウルツプと聞いては、損得を考へるものには、すぐ行く氣にはなれまいよ」

「ハツハ、、、、弱いモンですな」

「お前は、彼地の事情を、知つて居るから、何の事もなく、お受けも出来るであらうが、唯だ一通りの船乗り、といふ丈けては、ちよつと行く氣にはなれまい」

「お上の御用といふのでは、よつほどむづかしいことでもあるのでせうが、御存じなら教へて下せえな」

「その事は、くはしく知らないが、左迄に、大した事はないやうにも、聞いて居る。つまり、船夫の募集といふのだから體が丈夫で、船や海の事に、明るいものなら可い譯だ、と思ふ」

「それ丈けの事なら、何でもねえが、どういふ風にしたら、いゝのでせうか」

「雞聲ヶ窪の與力の御息に、近藤重藏といふ御方があつて、蝦夷地取締御用の爲め、出張を命ぜられたのが、船夫募集の御沙汰の起りだから、とに角、近藤様に願つて出たら、可いのだらう」

「へー、近藤……重藏……へー」

「何を考へて居るのか」

「その旦那は、以前も蝦夷へ行つた人でせう」

「左様ぢや」

「それで思ひ出した。それぢやア、大層強い人だ、と聞いて居るが、さうでせう」

「學者で、武道に達して居て、豪傑肌の人物ぢや」

「何でも、エトロフへ、渡つた時は、海神を叱りつけた、とかいふので、松前の方迄、評判になつたさうです」

「そんな事もあつたやうに、聞いて居る」

「ロシア人を、片ツ端から張り殺した、といふ噂もあるのです」

「左様かな」

「有難う御座えやした、お蔭様で、永年の望みが届くといふもんだ」

「お前は、もう行く氣になつて居るのか」

「魂は、疾くの昔に、向ふへ行つて居るのだから、今度は、體を運ぶのです」

「實に、お前は、愉快な男子ぢや」

「旦那に、賞られたツて始まらねえ、ハツハ、、、」

「そりや、左様ぢや、わしが連れて行くのでは、ないからな」

それから、御馳走を出して、役人を歡待した。

役人が歸ると、すぐに、配下の船夫を、残らず集めた。

「お前達に、少し相談がある」

「何ですか、親方……」

「わしは、お上の御用船乗りをしよう、と思ふが、みんなは、どう考へる」

「御用船に乗つて、どこへ行くのですか」

「蝦夷地へ、はいるのだ」

「それぢやア、歸えるのでせう」

「まア、左様だ」

「何のこつた。そんな事なら、相談も何も、ねえぢやアありませんか」

「そこが、相談だ」

「どこが……」

「函館や松前へ歸えるのなら、何でもねえが、エトロフやウルップの方へ行く、となつたら、どうだ」

『面白い事だ』
『ぜひ連れてッておくんせえ』
『承知か』
『へー』

『それぢやア、これから一同の名を書いて、願つて出よう』
『有難てえ、お上の御用船に乗つたら、一代譽れだ』
『船乗りの冥加に叶つた、といふものだ』
『親方、はやく願つて下せへ』
『可し。それぢやア、直ぐに願つて出よう』
嘉兵衛は、願書を認めて、一同の名を列ねた。

二二

其後の近藤重藏は、いよく上司の信用を得て、終には、蝦夷地取締御用を命ぜられて、近く出發の運びに迄なつたが、初めは取調を命ずる、といふのであつて、國後島まで、探險して歸り、今度は、取締といふ、重い役を申付けられたのであるから、重藏の身分としては、先づ満足す可きであつた。
與力の家に生れて、文武の道に達し、性來の膽力は、人を凌ぐの風があり、稍や傲岸のところはあつたが、士氣の頽廢した、當時に於ては、斯うした人物も、必要であつたに違ひない。
擇捉で、ロシア人の鼻柱を、グワンといふほど、叩きつけたことは、幕府の役人に、頗る好感を與へて、重藏に對する評判は、非常に良くなつて來た。

蝦夷通の最上徳内から、當時の模様を上申して、頻りに重藏を激賞したところから、猶ほ更に、上司の信用は、厚くなつたのである。
されば、重藏の進言に聞いて、蝦夷掛りなるものが設けられ、その主任として、松平信濃守が、席に就いたので、蝦夷に對する、幕府の方針は、全く面目一新の觀があつた。
重藏の蝦夷行きは、既に決つて、出發の日取も、定まつて居るのだが、肝腎の船方に、故障が起つて、出發の運びが進まず、重藏は、獨り疳積を起して、焦々して居るのであつた。
福山へ行けば、最上の紹介で、擇捉へ連れて行つた、渡島屋五作が居るから、それから先きは、どうにでもならうが、苟も、幕府の人命を拜して、品川から乗出す、といふ場合に、この航海を引受ける、船方のない、といふことになれば、第一には、幕府の威信を傷け、第二には、自分の信用にも關する、といふので、重藏は、ひどく之れを、氣に疾んだのであつた。
今は、彌生の花時、上野隅田は、いふ迄もなく、御殿山から飛鳥山へ、かけての人出は、さすがに、大江戸の春で、その賑はひは、格別の事であつた。
太平が、二百年餘もつゞくと、士人の心が、追々に荒んで來て、歡樂と遊蕩にのみ耽り、その魂までが、色と酒と金に浸つて、墮落しゆく状は、とても、正視することの出來ぬほど、汚ないものであつた。
斯うした時代に、重藏のやうな人物が、出て來たことは、眞に異數と、いふ可きである。
肌觸りのよい、絹物の衣裳を着て、派手な、長襦袢に、細身の大小といふ好みで、花柳の巷へ、出入するものゝ多い時代に、相變らず木綿の紋服で、武藝と讀書にのみ、心を傾けて居るのだから、花見の趣向に、日を暮らすやうな莫迦々々しい事もせず、況して、蝦夷行きの船夫募集に、一頓挫を來たして、今は此一事にのみ、心は惱まされて居るのであつた。

庭の櫻は、今を盛りと咲き亂れて、その眺めは、一としほであつた。重藏は、何か考へ乍ら、庭に面した、一室の障子を開かせて、一人寂しく坐つて居た。

所へ、用人の高瀬又平が来て、

「ハツ、申上げます」

「何事か」

「蝦夷行き船夫募集について、高田屋嘉兵衛なるものが、お目通りをいたしたい、と申して、お玄關まで、まゐつて居りますが、いかゞ取計ひませうか」

之れを聞くと、重藏は、思はず膝を進めた。

「何と申す、蝦夷行き船夫の儀について……ふむ」

「いかゞ、いたしませうか」

「高田屋嘉兵衛と申したな……」

「ハイ」

「何人かの紹介でも、あつてか」

「否、それは無い、さうで御座います」

「可し、これへ通せ」

「ハツ」

用人は、すぐ玄關の方へ去つた。跡に、重藏は、考へ込んだ。しばらくして、その男は、用人と共に、重藏の前へ出た。體格は小さいが、骨組みのがツかりした、全身は、陽に焼けて、眞ッ黒になつて居る。眼付きの鋭い、口元の大き

い男で、どことなく一と癖、ありげな奴である。

「俺は、近藤重藏ぢや。其方が、高田屋嘉兵衛か」

「ハイ」

「何用あつて、まゐつたのか」

「蝦夷行き船夫を、募つておいでの趣、人傳手に聞きやして、お伺ひいたしたのです」

「ふふむ」

「どうか、わたくしを、つれて行つて貰ひ度いのですが、どうでせう」

態度や言語は、全く粗野で、いかにも、船乗らしいところがある。近藤の如何なる人物と、いふことは、假し知ら

ないにしても、公儀の役人だ、といふことだけは、知つて居るのだらうが、何の恐れ氣もなく、ずば／＼物をいふ、

無遠慮の調子が、重藏の氣に容つたので、ちつと見詰めて居た。

四

「旦那、おゆるしが願えやせうか」

と、嘉兵衛は、重ねていふた。

「蝦夷の勝手を、少しは心得て居るか」

「函館や松前の事なら、ちつとは、知つても居ますが、それから奥の方は、よく知らねえから、ぜひ行つて見て、え、

と思つて、平生から、願つて居たのですが、どうしても、其機會がねえので、弱つて居たのですが、お上の方で、

いよくお手入になる、とかいふので、船方のものを募ると、聞いて、旦那へ、願ひに來たのです」

「俺が、蝦夷へ行く、と聞いたのか」

「へい」

「航海の事は、心得て得るのぢやな」

「若え時分から、船乗りを、稼業にして居たので、海の事なら、人並にやつて退ける、つもりです」

「生れは、どこぢや」

「淡路で、御座えやす」

「今でも、船乗をいたして居るのか」

「へい」

「船持か……」

「船も、持つて居ます」

「専ら、どこを乗り廻して居るのか」

「大阪と函館松前の間を、乗つて居るのです」

「このたびの御用と申すは、エトロフから、ウルツプの方へ、まゐるのぢやが、それを承知で来たのか」

「左様で、御座えやす」

「其方が、一人まゐり度い、と申すのか、その外にも居るのか、どうぢや」

「只今のところ、十三人は居りやすが、函館の方へ行つたら、いくらでも、人間は居りやす」

「之れについて、何か書面のやうなものを、持つてまゐつたか」

「へい、持つてまゐり、やした」

「それを見よう」
嘉兵衛は、願書を出して、

「これで、御座えやす」

願書とはいふが、極めて簡單なもので、募りに應じて、行き度い、といふ文の事が、卒直に書いてあるのみで、配下らしい船夫の名が、その末尾へ、ズラリと書いてあつた。

「この連名は……」

「わたくしが、永年使つて居りますものばかりで、河童のやうな奴です」

「外には、何も書いたものは、持参いたさぬか」

「こりやア、願ひ書ではねえが、こんなものを、持つて居りやす」

と、いひ乍ら、取り出したのは、高橋三平から渡された「出羽の酒田から松前迄の産物運送に關する御用を申付ける」といふ書附であつた。

「はア、其方は、之れを持参して居るのか」

「へい」

「何故、はやく出さなかつたのか、これがあれば、話は、すぐつくのぢやつた」

「そりやア、酒田から松前の事ばかりで、エトロフやウルツプの事ぢや、ねえのです」

「ハツハ、……、正直な奴ぢや」

重藏が笑つたのを、どういふ譯で笑つたのか、嘉兵衛には、よく解らなかつたらしい。

「勘定方の高橋から、其方へ與へた書附ではないか、はやく申せば、それだけで、話はまとまつたのぢや」

「左様でしたかね」

「可し、承知いたしました」

「連れて行つて、くれますか」

「連れて行く」

「有難う、御座えやす」

「まア、ゆつくり話してゆけ。もう少し、聞き度い事も、ある」

「へい」

重藏は、用人を呼んで、

「夕食の用意をいたせ」

「ハツ」

「酒も、序に……」

「ハツ」

「いそいで、いたせ」

用人は、奥の方に行く。

その間に、嘉兵衛は、庭の櫻を見て、ニコ／＼してゐる。

近藤は、すつと立上つて、床の刀掛けから、大刀を取つて、元の席へ返つた。

それを、スラリと抜いて、嘉兵衛の前へ、ずつと出した。何といふことなく、抜刀をつきつけたのであるが、別に

切らうとする構へもせず、さればとて脅して見よう、とする容子でもなかつたが、とに角、人の鼻先へ、抜刀をつき

つけるのは、おだやかな事ではない。

嘉兵衛は、その抜刀をぢろりと見て、

「旦那ッ、大したもんですな」

抜刀は、スラリと、鞘へ納まつた。

「良い度胸ぢや」

「へッ……」

膳部が出た。重藏は、頗る機嫌よく、嘉兵衛を、歓迎してやつた。

翌日は、嘉兵衛の名で、船方引受けの願書が、其筋へ差出された。重藏が代つて書いたのである。

五

その後も、重藏は、引續き嘉兵衛を呼んで、今迄の経歴を、詳しく聞いて、之れを、一篇の文書として、信濃守の手許へ、船手引請の願書に添へて、参考の資料に供したので、信濃守は、悉く之れを讀んで、何となく嘉兵衛を見

たくなつた處から、重藏へ、その趣を、申送つて來た。

重藏も、多分はさういふ事にならう、と考へて、した事であるから、直ぐに、嘉兵衛を呼んで、之れを傳へる事に

した。

「急の御用といふので、直ぐにやつて來たのですが、御用は、何でござえやすか」

「外の事でもないが、松平信濃守殿から、其方を、同道して參るやうに、との事であつたから、それで迎ひを出した

譯ぢやよ」

「へ、エ、さうで御座えやすか」

「これから、直ぐに參る事にいたさう」

嘉兵衛は、自分の着て居る物に、眼を注いで、少し考へて居たが、

「松平信濃守とかいふ旦那は、どういふ御役の方か知らねえが、こんな服装をして居てもいゝのでせうか」

と、云はれて、重藏は、嘉兵衛の姿に、察乎と、眼を注げながら、

「成る程、どう見ても、船夫の親方としか見えぬが、却て、其儘の方が、可からう」
「失禮だなんて、文句を云はれるやうな事は、ねえてせうな」
「つまり、船夫を募集する、といふのに應じて来た、其方の事だから、船夫其儘の風體が、物を偽らぬ證據で、信濃守殿も、喜ばれる事であらうから、その服装は、改めずに行く事に致さう」
「旦那が、さういふのなら、私の方でも、此儘の方が勝手だから、之れて勘辨して貰ふ事にしませう、ハツハ、、、、」
松平信濃守は、書院番頭で、身分は、旗本であるが、兎に角、蝦夷係の主任であるから、その勢力は、却々大いものであつた。

重藏の所から、返事があつて、

「今、本人を同道で、これから出頭する」

と、いふて来たから、嘉兵衛を、見る事に、一種の興味を以て、待ち兼ねるほどであつた。

信濃守の補佐役たる、石川左近將監は、勅定奉行を、勤めて居たので、これも相當に、權勢のある人であつた。同役の羽太庄右衛門は、目附役勤務中で、これを兼任して居たのだから、共に羽振りの利く方であつた。

此二人にも、信濃守は、案内状を、出して置いたから、聽て来るに違ひない。要するに、嘉兵衛の人物鑑査を、しようといふのであつたらしい。

「ハツ、申上げます」

「何事ぢや」

「只今、近藤重藏殿、見えましたして、船夫嘉兵衛を、同道仕つた、と申して居りますが、如何取計らひませうか」
「左様か、これへ、案内いたせ」

「ハツ」

聽て、嘉兵衛は、重藏に伴れられて、信濃守の前へ出た。

「豫ての御沙汰に依りまして、船夫嘉兵衛を、召連れしました」

「それは、御苦勞で御座つた」

嘉兵衛の服装は、船夫その儘であるから、信濃守も、聊か不審に思つて、凝乎と、見つめて居た。

此時、重藏は、膝を進めて、

「本人服装の儀は、強ひて改めさせず、船乗の姿を、其儘に御覽に、供した方が、宜いやうに考へて、召連れしました

が、如何は思召さるゝか、御都合に依つては、直ちに服装を改めさせても、差支へ御座らぬが、如何致しませうか」

斯う云はれて見ると、却て、その方が興味のあるやうな氣もするので、信濃守は、微笑を浮べて、

「近藤氏のお取計らひ、流石と存する。其儘にて、一向差支へ御座らぬ」

と答へて、信濃守は、嘉兵衛の方へ、向直つた。

「其方が、高田嘉兵衛と申すか」

「はい」

「先般、願ひ出た趣は、書面の通り、相違ないか」

「はい、那の通り、相違御座りませぬ」

「此度の御用は、國後、擇捉、其他の島々を、巡るのぢやが、それに就いて、充分の覺悟があるか、どうぢや」

「別に、覺悟といふ程の事は無えが、何でも生命懸になつたら、出來ねえ事はあるめえと、思つて居るだけの事で、

さう大した仕事でも無え、と思つて居りやす」

「フ、ム、却々勇ましい事を申し居る。その覺悟なら、此の大役は、勤まるであらう」

『どうか、何分宜しく、お願え申上げやす』
 『其方の部下は、どれ程居るか』
 『今の所、十二三人は居りやすが、函館や、松前へ行けば、幾人でも人間は居ますから、船夫の御心配は、なさらねえでも、宜いでせう』
 『書物も、總て披見致したが、其方の履歴に依れば、航海の事には、却々の経験もあるやうぢやから、其點に就いては、安心致して居るか、何分にも、大切の御用であるから、心して勤めなければならぬぞ』

六

信濃守と、嘉兵衛の問答を聞いて、重藏は、嘉兵衛が、存外に物驚きをしないで、平氣に應答をして行く、その調子を見て、愈々感心したが、信濃守の方でも、更に横式振らず、碎けて話し込むから、これならば大丈夫と、安心して、話の切れるのを、待つて居た。

處へ、石川左近將監と、羽太庄右衛門が、見えたといふので、信濃守は、嘉兵衛に向つて、
 『只今、これへ御見えになる御方は、御勘定奉行の石川殿と、御目附の羽太殿であるから、よく注意して、お尋ねの趣に、お答へを致すのであるぞ、よいか……』

『へい、有難う御座えやす』
 石川と羽太が、席に就て、先づ信濃守へ、一通りの挨拶が済んで、重藏へも、會釋があつた。
 信濃守は、兩人に向つて、
 『これなる者が、豫て御相談申上げた、高田屋嘉兵衛で御座る。船頭風情には、珍らしいしつかりもので、充分に此度の大任は、果せるやうに存するが、御兩所の御見込みに依つて、明日にも、御用の旨を、申し告げ度く存じて、

わざ／＼御來駕を、煩はした次第で御座る』
 石川は、之れに答へて、
 『それは、御念の入つた御辭で、却つて恐縮いたす。御手前が、此者にて、宜しい、と思はれたなら、吾等に於て、異存のあるべき次第は、御座らぬ』

羽太も、それと同じやうな事を答へて、これから、交る／＼、函館や、松前の事情を、尋ねて見ると、思つたよりも詳しく、知つて居るので、すつかり、嘉兵衛が、氣に入つてしまつた。

殊に、船頭姿を其儘に、少しも飾つて居ない所が、ひどく二人の感じを、良くしたらしく、航海や船の事に就いて、種々と尋ねるのを、嘉兵衛が、一々答へる。言葉こそ、ざつかけないが、その言ふ所には、至誠が現れて居るから、非常に興味を以て、嘉兵衛を相手に、長話をして居る中に、酒肴の用意が出来て、これから飲み始めた。

紹介者の重藏も、斯うした調子に、事が運んで行くと、何といふ事なく、愉快を感じて、酒盃を重ねるのであつた。時刻も、大分過ぎて、夜は、深更に近くなつたから、酒宴を、切上げた後も、話は、容易に盡きず、何時迄経つても、際限がないから、そこで、重藏は、信濃守に向つて、歸宅挨拶を始めた。

豫て、用意してあつたものか、嘉兵衛の前へ、何かしらぬが、包物を出して、信濃守は、
 『これは、ほんの寸志ぢや。納めて置いて、呉れ』
 嘉兵衛は、その包物を、凝乎と、眺めて居たが、
 『これは、何で御座えやす』

『今日は、苦勞を掛けて、氣の毒であつた。これは、予の寸志ぢや』
 『これを呉れる、と、いふんですか』

『さうぢや』

『有難う御座えやすが、これは貰ひますめえ』
『何と申す』

『あつしは、物を貰ひに来たのぢやねえ。蝦夷地へ渡る、船の御用を、許して貰ひてえので、願つて出たので御座えやすから、それさへ許されたら、外に何一つ、貰ひてえものは、無えので御座えやす』

齒に衣着せず、思つた儘を、云つて退けた。其處に、嘉兵衛の旨味はあるのだが、斯ういふ調子にやられたのでは信濃守も、一寸困つたが、まさかに、

『左様か』

と、云つて、其包物を、引込ます譯にもならぬので、暫くは、嘉兵衛の顔を、見て居たが、

『其方の申す事は、一應尤もである。併し、之れは、予の寸志であるから、是非納めて貰ひ度い』

『そんなに、御鼻負に思つて下さるのなら、あつしの方には、外に貰ひてえ物があるんです』

幾ら潔白なやうでも、要が、船夫の事として、矢張り慾の皮が、突ツ張つて居るものか、自分の方に、望みがあるなぞは餘りに遠慮がなさ過ぎる、と思つて、石川も、羽太も、重藏と、顔を見合せて、眉を顰めた。

信濃守は、言葉優しく、

『其方の望みといふのは、どういふ物か……』

『あつしの欲しい、と思ふのは、此御用を、勤めた跡で、蝦夷近海一圓の通航を、許して貰ひてえのです』

之れを、聞いた時には、四人共に、意外の思ひをした。何處までも、立派な魂の持主として、只管感心するの外はなかつた。

『よし、其儀は心得居るぞ。併し、それはそれとして、此包物は、受け納める事に、致したらどうぢや』

『へい、さう話が解れア、此包物も、貰ふ事に致しやせう』

重藏は、膝を進めて、

『竹を割つたやうな、サツパリした氣分の男で、町人風情には、珍らしい所のある者と、見込んで、御紹介申したが

御氣に入つて、拙者の面目も、立ちました』

其夜の首尾は、極く上吉で、嘉兵衛は、引揚げて來た。

七

公儀の役人に呼ばれて、怯めず臆せず、思ふた儘に、言つて退ける、その態度は、全く丈夫の魂あるものでなければ、容易に出来ることでない。

而かも、與へられる物は辭退して、蝦夷近海の通航を公許してくれ、といふ希望は、どこ迄も、渡海を稼業とする

ものに、相應した願出であるから、信濃守を始め、席に列なるものは、皆な感心した。

紹介の爲め、附添ふて來た重藏は、殊に喜んで、ます／＼嘉兵衛に、目をかけるやうになつたから、役人の方への

氣受けは、頗る好都合に、なつて來た。

數日経つてから、嘉兵衛は、信濃守に、呼出されて、

蝦夷近海通航之儀、勝手たる可き事

と、認めてある免狀を、貰つたので、日頃の希望は、之れで達せられた譯だ。

自分の持船は、親しくして居る、函館の廻船問屋へ、一先づ預ける事にして、幕府の船へ、乗る事になつた。

『お前さん、斯んな嬉しい事は、ないだらう』

と、お北は、自分も、嬉しさうな顔をして、嘉兵衛に、寄り添ひ乍ら、斯ういふた。

『男一疋に生れて、船乗りを稼業にして居る以上、此位ゝの事を、一度はやつて視なけりやア、面白くねえのだ』

「お上の御用船に、乗るやうになることを、故郷の人達が聞いたたら、びつくりするだらうね」
「これで、死んだ爺ツつア人も、草葉の蔭で、喜んでくれるだらう、と思へば、己れやア涙が出て、たまらねえ」
「けれども、その涙は、嬉し涙なのだから、いゝぢやないか」

「左様いやア、そんなもんだ」

「兵庫屋の叔父さんや、津の國屋の旦那も、さぞ喜んで居るでせうね」

「那の人達は、己れを、鼻負に思つて、一方ならぬ世話をしてくれたのだから、それだけは、死んでも忘れねえつもりだ」

「御用船乗りでも、わたしは、矢ツ張り一しよに、行けるのでせうか」

「いくら御用船でも、女の爲ることはあるから、矢ツ張り乗つてゆくのだ」

「わたしは、お前さんの出世は嬉しいけれど、一しよに乗つてゆけないのではなからうか、と思つて、そればかりが心配でならなかつたのですよ」

「心配することはねえ、近藤様にも願つておいたから、安心して居ねえ」

「近藤様ツて御方は、大層強い人だツていふから、わたしはそれが、氣懸りになつてならないが……」

「それも、心配御無用だ。強い人には違へねえが、女子供には、やさしい人だ」

「さうかね」

「今度の事では、近藤様の御骨折て、己れも男になれたのだから、御恩を忘れちやアならねえぜ」

「そんなに、骨を折つて下すつたの……」

「うむ、信濃守様のところへは、近藤様が、連れて行つて、下すつたのだ」

「左様でしたか」

「斯んな話は、いつまでして居ても、同じ事だから、もう止めよう。それよりか皆なにも、一ぱい祝はせてやれ」
「それが、いゝでせう」
これから、酒や肴を、取り揃へて、船夫等を集めて、馳走をはじめた、前から、乗つて居たものと、今度、新しく乗込んだものと、それを一つにして、改めて嘉兵衛から、いろ／＼の申渡しを爲る。一同は、それを聞き乍ら、祝酒に親しむのであつた。

寛政十年の三月二十日、いよく船は、函館へ向つて、出帆した。
蝦夷地取締といふ、重い役目に就いて、近藤重藏は、十数名の下役と共に、この船へ乗込み、千島の端へ、探險を試みる、といふのであるから、その時代としては、眞に一大壯圖、といふ可きである。

函館から、海上二百里、擇捉は、前年の経験もあつて、其處までの航海には、重藏も、心易く思つて居るが、さらに進んで、奥深く行かう、と爲るのが、今度の目的であるから、それに就いては多少の懸念もあるものであつた。

幸ひにして、嘉兵衛といふ快男子を得たので、幾分の安心はあつたが、それにしても、今度の役目は、よほど重大な責任があるので、その注意は、可成り周到なものであつた。

函館までは、無事の航海で、それより福山へ乗込み、松前侯にも對面して、幕府の内命を傳へ、一だんと蝦夷地の取治め方につき、充分の注意も與へた。

此處で、船の支度に、十數日を費し、やうやく、出帆の運びになつた。

八

重藏の一行が、國後島のアトイヤへ着いたのは、七月の初旬であつた。
多くの男の中に、たつた一人の女だが、固より男まさりの氣性で、何でも行つて退けるといふ、元氣があるから、

どうか爲ると、鬼のやうな奴も、お北に、叱り飛ばされて、恐れ入ることもあり、三度の食事は、お北の手一つで、取扱はれて居るのであるが、實に能く行届いて、寸分の隙もなく、立派に賄つて居るのを視ては、誰として感心せぬものはなかつた。

自分の思ふて居ることを、押通さうとする時の嘉兵衛は、實に雄辯を揮ふが、左もなき時は、一切黙りこくつて、碌に話も爲ぬ、といふ風であるから、配下の船夫も、何となく恐れて、可成く叱言をいはれぬやうに、氣をつけて働く。

重藏は、嘉兵衛を呼んで、『この灣は、船着きに都合のよい所であるが、少し風が吹くと、浪が荒くて、船を近寄せることに、苦しむやうであるから、丈夫な浪除を、つくることにいたしては、どうであらうか』

『それは、よい御考へで、御座えやす』

『お前が、指圖役になつて、その工事に、かゝつてはくれぬか』

『承知いたしやした』

相談は、極めて、簡單で、すぐに人を集めて、工事に着手して、下廻りの役人は勿論、船夫のすべては工夫になつて、土人の多くも、募集に應じて働きはじめたから、工事は、ドン／＼運ぶ。重藏の注意で、勞銀は、惜まず與へた。土人等は、思ひも寄らぬ、金儲けになるところから、皆なやつて来て、勞役に服した。役人も、外に用事は無いのであるから、一しよになつて、能く働いた。

約一ヶ月ばかりで、堅牢な防波堤が出来た。それから後の船着きは、極めて都合よく、第一に喜んだのは、漁業を生命として居る、土人等であつた。

難く思つて居た。その上に、重藏の武術と膽力には、ひどく驚いて居るから、何でも其命令には、従順に服して居るので、斯かる土木を起すにしても、自分の方から、進んで来て、一生懸命に働くから、工事の進捗は良かった。

働きに来た、土人に對しては、それ／＼酬めてやるから、一人として不平がましいことを、いふものはなく、却て平生の稼ぎよりも、酬られる方が多いのであるから、その喜びは一通りでなかつた。

部下の役人や、船夫に對しても、それと同じやうに、手當を與へるから、みな進んで、仕事を爲る。工事の運びの良いのも、畢竟は、斯うした事情からであつた。

嘉兵衛夫婦の働くことは、また格別であつた。初めから重藏に、心服して居たのであるが、同じ船に起臥して、寢食を共にして見ると、實にやさしい心のある人だ、といふことも知れて、平生のいかめしい調子や、疝癩を起した時の大喝にも、反感を有つこともなく、忠實に、能く仕へるので、重藏の方でも、嘉兵衛には、大概な事を任せて、あまり干渉がましいことは、爲ぬやうにして居た。

擇捉へ渡るには、尙ほ相當の準備も要るから、此處で、すつかり、其れを整へるつもりであつた。

今後、誰れが来るにしても、千島を取締るには、此處が根據地になるのであるから、土人を手馴づけたり、種々の施設をしたり、それ等の事に、豫定よりも日を費すことになつたのである。

船には、僅に二三人の船夫を残して、ほんの番人にしてあるのだが、その外のものは、みな上陸して、會所へ、泊る事になつて居た。番人になるものは、組を定めて、交代する事にしてあつた。

夜になると、嘉兵衛は、會所を拔出して、どこかへ行く、それが毎晩のやうに續くので、お北も、少し變とは思つたが、強て咎めもせず、その儘に、見過して居た。

いくら、夜遊びを爲る、といったところで、美味しい酒もなく、美しい女もない、土地の事であるから、心配するほどの事はなく、何か考へる事でもあつて、出かけるの位に、思つて居た。

それは、何時か、重藏の耳にも入った。或夜、重藏は、こつそり嘉兵衛の跡を尾けた。それとも知らず、嘉兵衛は海岸の方へ、暗い夜道を、ブラリ／＼と、やつてゆく。町といふほどに、人家は多く無い。離れ／＼に、土人の家があり、内地の人も、近頃になつて、十人餘り來て居るが、それ等の人を、残らず入れても、百名餘りであつた。會所の外に、夜の灯を用ひる家はないのであるから、鼻を掴まれても解らぬほどの、暗さであつた。アトイヤの岩頭に、嘉兵衛は、獨り立上つて、折柄の弦月を頼りに、ちつと海を看下して居るが、まさに不動の姿勢である。

九

見渡す限りの大海原、すぐ眼の前に、點々として、散布して居るのが、千島群島である。弦月の夜、それを、一々見定めるには、稍々暗きにすぎた。一つ、二つ、空には星が、散らばつて居る。脚下は、十數丈の斷崖を、打ち返し／＼洗つて居る。浪の光りが、闇の夜を色彩つて、何ともいへぬ物凄さであつた。斷崖の端、一步を誤れば、忽ち引く浪に浚はれるのだ。その恐ろしい崖の上に、只だ黙々として、立つ人影は、それは嘉兵衛であつた。何を視て居るのか、ちつと見詰める。その眼は、闇にも光るか、と思はれるばかり、ふみ締る足には、總身の力がはいつて、岩から生へた、百年の老樹にも、似て居る。吹きつける風に、鬚髪は亂れて、陽にやけた顔の筋肉は、張り切つて、凄愴の氣が、漲つて居る形相は、見るからに、恐ろしいほどであつた。どうかすると、不動の姿勢が、少しく崩れて、萬雷の吼ゆるにひとしい、海潮の音に、耳を欲立てる事もあつた。最前から、足音をひそめて、その背後に、近く寄つた重藏が、その容子に、鋭い視線を注いで居ることは、嘉兵衛

も、氣が付かぬらしい。斯くて、しばらくは、相互に物も言はず、嘉兵衛は、闇い天空を、見詰め乍ら、吼ゆる海潮に、耳を欲立てる。重藏は、ちつと嘉兵衛の姿に眼も放たず、その動作を窺ふのであつた。心のうちに、重藏が、ひたすら感心したのは、斯うして居る、嘉兵衛の軀に、少しの隙も無いことであつた。前に、氣を取られるものは、後に、隙の生ずるものである。無心に立つ姿に、少しの隙もないのは、武藝の心得なきものに、珍らしい事だ。

『えいッ』

と、重藏は、不意に氣合をかけた。

同時に、腰の一刀が、チャリンと鏗鳴りをしたが、嘉兵衛の姿勢は、依然として、不動の儘であつた。

重藏は、微笑を漏らして、傍らの岩に、腰を下ろした。嘉兵衛は、今の氣合を知つてか、それとも知らぬのか、泰然として立つて居た。

そのうちに、天明は近づいた。東の空に、黄金色の雲が動きはじめたのは、もう太陽の昂るに、間もない時であつた。

嘉兵衛の姿勢は、全く崩れた。今迄の緊張し切つた軀は、急にぐつたりして、ふみ締つた足が、向きを變へると、重藏の居る方へ、一步進んだ。

『ヤツ、旦那でしたか』

『オー、嘉兵衛ッ』

『何時、おいでになりやした』

『最前から、來て居る』

「へー、左様でしたか」
空とぼけて居るのではないか、と思はれるほど、ケロンとして居る。その落ち付きは、面憎い位であつた。
「お前が、毎晩のやうに出かけて、何をして居るのか判らないが、天明は歸つて来る、と、いふて噂をいたして居るものがあるゆゑ、今宵は、尾けて來たのぢや」
「左様でしたか」
「最前かけた心の氣合には、いかなるものでも、堪へられぬのであるが、お前には、利目が無かつた、ハツハ、、、」
「へー、氣合をかける、といふのは、どんなことですか」
「まア、それはよいとして、お前は、何をいたして居たのか」
「船乗といふものは、潮の干満を、知つて居るのが、一番に大切なことですから、それを見に來て居たので、御座えやす」
「ふふーむ」

「潮の干満といふものは、月の出入りと關係があるので、その呼吸が判れば、それでいゝのですが、内地の海と違つてこつちの潮は、全然て容子が判らねえもんですから、斯うして十日あまり、苦しみやしたが、もう大丈夫で御座えやす」
「イヤ、實に熱心なものぢや。その心掛があつて、日本一の航海者、公儀の御用船に、長たる眞價はある、といふものぢや」
「そんなに賞られちやア、少し面目が悪くなりやすが、まア自分の務めてすからね」
「擇捉行きも、近日ぢやが、その用意とも思はれる。實に立派な心を有つて居る、と感心いたした」
「……………」

「さア、行かうか」
「へい」
兩人は、しづかに立上つた。
北太平洋の旭日は、海の上に、キラ／＼と輝いて、その雄姿を現して居る。

一〇

日和も、續いて良いし、船の支度も出來て、いよ／＼擇捉へ、向ふ事になつた。

嘉兵衛が、潮流の研究は、アトイヤの一夜丈けでなく、常に其點に就ては、人知れぬ苦心をして居たのだ。
學問の修業は、少しもしたことの無い男で、辛うじて寒喧の挨拶状を、書き得る程度のものであつたが、自分の職業に對する、忠實な研究は、一日として怠らなかつた。
それに、人並外れた、太い膽玉を、有つて居たので、いかなる場合にも、あまり立騒ぐことはなく、落付き拂つて仕事にかゝるといふ餘裕があるから、失敗を爲ることが少なかつた。
重藏は、嘉兵衛と、對座した時に、いろ／＼の事を聞かせて、教へを怠らず、重藏から聞いたことは、嘉兵衛の爲めに、一種の學問であつた。
重藏は、嘉兵衛を、深く信じ、嘉兵衛は、重藏を、飽迄も尊敬して、居る。兩者の意氣が、ピッタリ合つて居るから、萬事の進みは良く、航海の上にも、また探險の上にも、すべて好都合であつた。
安政三年版の蝦夷行程紀といふ、古い小本がある。阿部喜任の旅行記で、松浦竹四郎が、校訂して居るものであるが、それを見ると、斯う書いてある。
群魚子利島 一名を、ラムシヤ島といふ。これ那弗加の第一島なり。周廻九十二里餘なり。坤より長に長く、

東西兩部に分る。産物多し、西洋人は、之れをスターテン、エトランドといふ。と、野作雜紀に見えたり。また、アトイヤに就ては、アトイヤ、番屋一軒止宿すべし。此處エトロフの渡り口、風待ちの處なり。此處よりアトイヤ石といへる、堅剛なる石を産す、火打石にすべし。と書いてある。

愛等侶府 周廻百五十五里半、或は二百里なりといふ。長より坤に流れ、長さ百餘といふ。南は北極四十六度北の岬は四十九度餘、經度百六十五度より六度にかゝる。郝弗加の第二島なり。西洋人は、之れをゴンバクニス、エイランドといふ。寛政度に、最上近藤山田等の諸有司相議して、高田屋某をして、船を此地に渡し、産物を處置せらる。此地、鱒、鮭、青魚、大口魚、其他雜魚多し。

高田屋の事は、此記事のうちに、出て居る通りであるが、郝弗加といふのが、千島を指して、さういふたのである。船は、タンネモイへ着いた。

極めて、不完全なものであつたが、松前藩の番所もあつて、すでに手入れ丈けは、すんで居たから、それを本據として、此地の土人を集め、今後の心得を諭して、新たに漁場を開く事にした。

之れに就ても、嘉兵衛の働きは、頗る功を奏して、十七ヶ所の漁場を、開く事が出来た。會所も新につくり、倉庫も設けた。その他の設備も、それ／＼につけて、立派な漁場になつた。

タンネモイとは、アイヌの語で、長き灣といふ事である。今では、丹根萌と書く。擇捉の南西端に當り、灣口の幅四哩、灣入一哩半、深き所は、七尋に達して居る。

重藏の考へでは、此處に根據を置いて、それから、奥へ進むつもりであつたから、嘉兵衛に命じて、越年の準備は勿論、一切の支度にかゝらせて、その計劃は、半ばに進んだ時、江戸表から、急使が来て、一先づ立歸れといふので

あつた。

嘉兵衛を呼んで、重藏は、此事を語り、

『まことに残念ではあるが、公儀の御沙汰は、如何ともいたし難い。拙者は、一先づ引上げる事にいたすが、若し再度まるることが、出来ぬ場合になつても、他のものは、必ず出役いたすに違ひないから、それ等の爲めに、出来る丈の設備は、いたして置き度いと、思ふに依つて、一層の奮發を、頼み度いのぢや』

『承知いたしやした』

それから、嘉兵衛は、重藏の命をうけて、必死に働いた。

嘉兵衛の心をいへば、跡へ残り度いのであつたが、それでは船の都合が悪く、自分は、幕府の御用船を、預つて居るのであるから、どうしても、近藤を、送つてゆく務めがある。勝手に残るなど、といふことは出来ぬので、せめては、此次に來た時、仕事の都合のよいやうにと、その設備には、可成りの努力と苦辛をかけたものであつた。

斯くて、重藏は、嘉兵衛と共に、タンネモイを發し、寛政十二年の秋、江戸表へ歸つて來た。

重藏三度蝦夷に入る

一
擇捉に、髯塚といふものが在る。それは、擇捉が、幕府の直轄になつてから、蝦夷人が、那の長い髯を切つて、日本政府の統治に服する、といふ誓ひを立てた時、函館奉行、羽太正養が、その記念として建たものであるが、その碑には、

『髯塚は、擇捉郡に在り、歸化の蝦夷人、剪る所の髯髯を聚めて、斯に埋む』
と、認めてある。

高さ四尺五寸、横一尺三寸にして、文化四年三月と、刻んである。

更に、之れを、詳しく書いて、裏面に刻ませたのであるが、その全文は、斯うである。

『惠登呂布島は、東蝦夷地の奥にして、松前を距ること三百里許、其島の廻りは、二百六十里に過ぎ、北極の地を出ること、五十里に餘り、極めて寒し。寛政の頃ほひより、蝦夷が島のことを、所置せさせたまひしを、享和二年には、筑前守藤原安論と正養とを其司として、彼千島の事を司らせたまふ。其中に、此島は、外國に近ければ、衛護最嚴なるべしとて、其官吏を選び、初には、近藤重藏守重、山田理兵衛嘉允、柳權十郎等が、はるく此處を承る。此地は、大難の離島にして、古より船の往來たやすからざるより、爰には住む夷等、衣食の品をはじめ、

魚捕る具など備はず、飢寒に迫るもの其數を知らず、彼諸官吏是を憂ふること切にして、攝津國兵庫の船人、高田屋嘉兵衛と云者は、海路の事に巧みなればとて、此人を薦擧て、船を遣らしむるに、則ち水路を考へ得て、初て大船の往來をしてより、年毎にわたる船たえず、諸々の品を運送し、魚捕る具も備はりければ、夷等、生業の道を得て、始て衣食に足ることを知り、手の舞、足の踏む覺えず、朝夕遙に本邦の方を望み、其國恩を仰いでやまず。抑も、此島は、外患の警衛のみにして、苟も國益を謀る可きにあらざりしが、思はざりし地も開け、人も増けるほどに、其國産を出すこと數萬に餘れり、是天より仁政を助けたまふなるべし。又、南部、津輕、兩侯の英士、許多遣りて守らせられ、此警衛は爰のみにあらず、蝦夷地の内、あまたの所にして、兩家の功績大なりと謂ふべし。已に如此、内外の所置全く備りぬ。かくて、夷等、其國恩を惶み奉るの餘り、髮を被り、袴を左にしたる姿を懶ぢ、皆上國の風俗を願ひ、自ら長き髯を剪り、髮を結び、男も女も、夷の姿なるもの、今や一人もなし。實にや、風を移し、俗を易ること、彼の諸官吏の功績にて、固より仁政の及ぶ所なり。則ち剪りたる髯を聚めて、此碑を建て、髯塚と名付けて、其國恩のいちじるしきを不朽に留むるのみ。歌に曰、かしこしないまそのときを蝦夷がすむちしまにあまるみよのめぐみは』

實に偉大なものであった。

只視れば、一篇の碑文にすぎないが、よく考へて見ると、北海開發の小歴史ともいへる。近藤や高田屋の功績は、松前藩の取治方に、幕府が、不満であつた爲めに、直接の手入れをする事にはなつたのだが、さればといふて、幕府の役人が、蝦夷に關して、どれ丈けの知識を有つて居たか、といへば、甚だ怪しいものであつた。

老中、若年寄、目附、といふやうな、幕府の大官連といへど、蝦夷の手入について、充分の覺悟があつたか、どうか、それも頗る疑はしいことであつて、ロシア人が、蝦夷を侵して来る、といふことについては、非常に恐威を感じて居たが、その對策さへ、徹底的に考へられて居たのではなく、従つて、事が起れば騒ぐが、さもなければ、手を拱

んで居るの、状態であつた。

最上徳内から、松前藩の取締が、怠慢であることを聞き、さらに、ロシア人の侵來に逢ふて、俄に騒ぎ出した丈の事で、平生から、蝦夷についての研究などは、少しも爲れて居なかつたのである。

要するに、無方針、無定見が、幕府の蝦夷に對する、立場であつた。

澤山の金を費して、近藤重藏を、蝦夷の奥地取締として、態々使はして置き乍ら、大した用もないのに、呼び戻してしまふ、といふやうな、つまらぬ事を、やつて居ただから、とても、お話にはならぬ。

重藏は、江戸へ歸つて来て、今迄の見聞を、書面にして差出した。

嘉兵衛は、厚く賞されて、お暇が出たから、久し振りで、お北を連れて、故郷を訪問する事になつた。

一一

ロシア人が、千島へ、出沒するやうになつてから、幕府の神經は、非常に鋭くなり、確とした方針は、別に無かつたけれど、役人を、多く送るやうにもなり、種々の獻策も爲る人があつて、蝦夷の事情は、やうやく判つて来た。

松平定信は、流石に、賢相といはれた人丈けに、はやくも、蝦夷手入を考へて、松前藩に對しても、峻烈な糾弾を加へた、ほどであるが、一たび、定信が、現職から退いたら、その後は、凡庸の老中ばかりで、何といふ目的もなければ、また方針も立てず、徒らに立騒ぐばかりであつた。

斯くて、北海の警報はいくたびか、繰返され、幕府の脅威は、ますます深くなるばかりだ。

於此、幕閣の意見も、やうやく定まつて、松前藩の蝦夷に於ける、支配權を取上げ、幕府の直轄として、北邊の防備は、徹底的に行ふ、といふ事になつた。

函館奉行としては、川尻肥後守と村垣淡路守が、新に任に就く事となり、すべてが、今迄と異つて来た。

何の意味もなく、不意に呼戻されたので、重藏には、非常な不平が有つた。一應の事情は訊かれて、その報告書は差出して置いたが、それについても、只だ書面を受理された、丈けの事で、別に、蝦夷取締に關して、意見を訊かれる、といふのでもなく、其儘に、打捨て置かれたのは、一種の侮辱を、加へられたやうにも考へられて、何となく不快に堪へなかつた。

村垣淡路守から、急使が来て、

『至急に相談したいことがあるから、すぐ来て欲しい』

との事であつたから、重藏は、更に氣は進まなかつたが、上司の命であつて見れば、行かぬといふ譯にもならず、すぐに支度して、村垣の役宅へ、やつて来た。

『ハッ、近藤重藏殿見えました』

『よし、これへ……』

村垣は、書齋を兼ねた一室に、重藏を、迎へるのであつた。親しみのある同輩か、よほどの知己でなければ、斯うした取扱ひは爲ぬのであるが、村垣と重藏は、只一通りの交際であつて、左程の親しみはないのであつた。

案内されて、重藏は、村垣の前へ出た。

『さア、それへ……』

と、いつて、設けてある席へ、指さす。重藏は、丁寧に挨拶して、その席へ就いた。

『今日は、私用を以て、お招ぎいたしましたのぢやから、打ち寛いで欲しい』

『何事の御用で、御座るか』

『拙者も、近く函館へ出發いたすのぢやが、それに就て、足下に、種々お訊ねいたしたい事の御座つて、御足勞を煩はしたのぢや』

「このたびは、新役御拜命、遠く蝦夷地へ、御乗込の趣、無御心勞の儀と、御察し申上げます」
重藏の詞は、極めて丁寧であつたが、聞く方にすれば、悔みをいはれて居るのと、同じ事であつた。
「足下の意見書も、一應は披見いたしたが、このたび、函館へまゐるについて、御心付きの儀も御座らば、御注意を願ひ度い、と思ふて、お招ぎいたしたので御座る」

「函館松前は、もはや内地と同じ事、別に之れと申して、お話いたすことも御座らぬが、奥地へ立入ると、風俗人情等も、全く異つて居るばかりでなく、言語の不通が、相互の不都合であつて、また、土地の拓けて居らぬ爲めに道路らしき道路もなく、内地より参るものが、一番に艱むのは、此一事で御座る。その代りに、天嶮無双、一夫之れに據れば、萬卒も破り難い、といふ所が多く、いづれにしても、海路を取る所に、交通の便は御座らぬ。海には、無限の資源があり、陸には、千古斧を加へざる、森林があり、海陸ともに、産物多く、之れを、巧みに開いてゆけば、國富を増すこと、受合て御座るが、今後は、公儀に於かせられても、その點に、深く御留意あるやう、願ひ度い。只一つ、今以て、不審に思はれる儀が、御座る。それは、外の事でも御座らぬが、公儀は、何故に百年の大計を建て、之れに臨まぬのであるか、實に疑惑に堪へぬ次第、愚案を以ていたせば、先づ函館の對岸たる、野崎に堅固な城砦を設け、危急の變に應ずる、御用意が、無くては叶ひますまい。次ぎには、政廳を、水陸の便ある、中央に設けて、土人を撫育し、内地人を送り、土地の開墾をなして、物産の輸出に努める事、御座るが、政廳の所在地としては、樺太、札幌、小樽のうちを、最も適當の地と存する。事あれば、人を送り、變起れば、兵を繰出し、常には殆んど一顧もせぬ、といふ遣方では、幾年経つても、北邊の事は、解決し得ませぬ。要は、平生の入手に在る。是等に就て、公儀役方の思召は、どうなつて居りますか、その判然せぬうちは、貴下の御赴任も、さらに甲斐なき事、御座らう」
と、平生の不平を包んで、しきりに北邊、入手の方策を論じたのは、流石に重藏であつた。

二二

重藏は、思ふさま、氣を吐いた。
之れを聞いて居た、村垣も、重藏の説く所には、頗る共鳴したが、それと、口に出してはいひ得ないのは、役目の上に對して、深く憤んで居るからである。
幕府が、北境の防備を、常に口にして居乍ら、實際に於ては、少しも、其運びの付いて居なかつたのは、重藏のいふ通りであつて、事變が起れば、狼狽して、役人を送る、といふ丈の事であつた。
その事は別として、重藏の説明で、函館や松前の事情は、よく判つたので、村垣は、非常に喜んだ。
「足下の御意見は、拙者からも、上司へ執次ぐ事にいたすが、只今の如き説は、御遠慮なく進言されるが、よいと存ずる」

「拙者も、天下の御爲と存して、目下筆を執つて居りますれば、近く提出の運びにも相成りませう。その節は、何分宜しく御執成しの儀、願ひ上げる」
「委細心得申した」

その日の會見は、それで終つた。
川尻と共に、村垣は、それから間もなく、函館へ出張した。
擧げの番所が、ロシア人の爲めに、焼打をされて、出張の役人は、捕虜になつたといふ、急報が來た。それからシヤナの番所も襲はれて、防戦の甲斐なく、乗取られたとの報知が、あつた。
此、於、幕府に、討露の儀が起つて、弘前の藩主、津輕寧親と、盛岡の藩主、南部利敬の兩侯が、その命をうけて、藩兵を、シヤナへ、差向ける事になつた。

老中堀田攝津守は、目付中川飛騨守を連れて、函館へ出張する。同時に、糧米一萬五千石を送った。是れ丈けの騒ぎであるから、その事は、民間へも漏れて、人心の動搖は、非常にはげしかつた。近藤重藏には、それより少し前に「松前奉行出役仰付け」といふ、辭令が下つて居た。けれども、重藏は、進んで行かうとも爲さず、上司の方でも、その辭令を出した儘、出張す可し、との沙汰は下さなかつた。左なきだに、幕府の無方針に憤慨して居た重藏は、この辭令をうけて、猶ほ一層、その不平を、高めるに到つた。松平信濃守から、急ぎの使ひが来て、

『是非、面談したい事があるから、取り急ぎ来て欲しい』

とのことであるから、とに角、支度を改めて、出かける事にした。

信濃守とは、可成り親しくして居たのみならず、重藏の意見は、平生から尊重してくれたので、重藏は、此人に對しては、さらに反感を、有つて居なかつた。

蝦夷の掛りとなつてから、相當に年月も、經つて居るので、信濃守には、北邊の防備について、意見も有つた、従つて、重藏を、大いに用ひて見たいとは思つて居るのだが、反對するものがあつて、自分の考へ通りにはゆかず、この點については、信濃守にも、いくぶんの不平はあり、重藏に對して、同情するやうになつて居たのである。庭に面した、客間の一室に、信濃守と重藏は、差向ひて話をつゞけて居た。

『只今も、申上げた通り、公儀の御方針が、自分には、更に判りかねる。事が起れば、狼狽の態で、事無き時は、平然として居られるが、全體、公儀に於かせられては、蝦夷や千島を、何と觀て居られるか。ひとしく日本の領土である、といたしたら、もう少し平生から、徹底した御手入れがあつて、然る可きものと、考へる。このたび、ロシア人が侵略してまゐつたのについても、その場所丈けへの御出兵は、何事であるか、此處を抑へれば、彼處に現れ東に西に、ところを定めず、出沒いたすやうに相成つたら、それを、どうなさる覺悟か。言語道斷、沙汰の限り』

申す可きぢや。先般、村垣淡路守殿に對しても、それ等の愚見は、一と通り陳述いたしてあるが、果して公儀へはそれが達して居るか、どうか。樺太、札幌、小樽の邊を選んで、中央の政廳を設け、不斷に取締りを附け、函館の對岸、野崎の邊りへ、新たに城砦を設けて、内地との聯絡を取り、緩急事に應ずるの備へがなければ、蝦夷千島は終にロシア人の爲めに、侵略し去られるのは、火を見るよりも明かである。況して、公儀が、直接の御手入れと相成つてから、頻々としてロシア人の侵略は、いさゝか公儀の御威信にも、關する儀と存じます。自分は、松前奉行出役の命を蒙つて、すでに數ヶ月に及ぶが、未だに、何の御沙汰も無く、只だ空しくいたし居るやうの仕儀で御座る』

と、辭色ともにはげしく、膝を突き詰めての談論に、さすがの信濃守も、少しく持て餘して居るのであつた。

四

たとへば、どれほど親しいにしても、幕府の無方針を非難して、何の遠慮もない、といった調子は、普通の士人にちよつと見ることの出来ぬ、大膽な態度であつた。

存外に、世馴れて居る、信濃守は、それを軽く受流して、ほどよく扱つては居るが、その實、頗る迷惑には、想つて居るらしかつた。

重藏の詞が、切れるのを待つて、信濃守は、膝を進めた。

『承つた所は、すべて御道理千萬であるが、要するに、老中方には、蝦夷の事情に暗く、それが爲めに、御方針も一定せぬので御座らうから、いづれ其うちには、何とか御方針も、相立つ事と思ふ』

『それが、可怪しう御座る』

『多ッ、可怪しい』

「左様う」

「どういふ點が……」

「蝦夷の事情に暗い、といはれるが、今迄に、いくたびか繰返して、その事情は、申上げてある。此事は、密に自分ばかりでは御座らぬ。不充分なものでは御座れど、松前藩からも、しばしば報告は来て居る筈、最上徳内、山田理兵衛、高橋三平、その外にも、多くの人々は、實地見聞したところは、申すに及ばず、各自の意見まで書添へて、それ／＼に、上申いたし居ることは、貴殿も、御承知で御座らう。それ迄の事があつて、猶ほ御判りが無い、といふのは、あまりに莫迦々々しくは、御座らぬか、ハツハ、……」

信濃守は、それ切り黙つてしまつた。重藏も、跡をいはなかつたので、しばらくは沈黙が、つゞいた。

丁度、夏の初めであつた。庭の打水を通して、夕ぐれの徐かな風が、そよ／＼と、吹き込んで来て、肌ざはりはいが、べつとりと汗は、兩人の額へ、滲んで居た。

「近藤氏、ちと御相談が、御座る」

「何事で、御座るか」

「急に、蝦夷へ、おいて下さらぬか」

「多ツ」

「もう一度、蝦夷地へ渡り、今迄に見ぬところを探険して、それを更に御報告下さることは、出来すまいかな」

「松前へ出役は、數ヶ月前に、御沙汰をうけ乍ら、その儘に、今日まで打過ぎて居るので御座るが、俄に其仰せは、

いかなる次第で御座るか」

「今日迄、御出役の延引は、我等の手落ちで御座つた。どうぞ天下の御爲めと思ふて、御出張下さるまいか」

重藏には、信濃守の心が、よく解らなかつた。自分が、幕府から冷遇されて居ることに、甚だしく不平を抱いて居

る爲めに、思ふさまいふて見たが、さればとて、信濃守に對しては、少しも反感を有つて居たのではない。然るに、信濃守は、自分が、はげしく議論をしたのに對して、すぐ斯ういひ出したのは、どう感違ひをしたのか、それともに幕府の無方針を、自分と同じやうに、深く考へて居たからであるか、その心が、よく解し得なかつた。

「いかゞで、御座る」

「……」

「御承知下さらぬか」

「その儀については、拙者も、かねて望んで居たので御座る、御勧めにまかせて、まゐるといたさう」

「それは、何よりの儀で、御座る」

「併し、これには望みが御座るゆゑ、御聞届け下さい」

「御希望を、承りたい」

「今度、まゐるといたして、西蝦夷の陸行を、試み度く存するが、特に御ゆるしを願ひたい」

「ふふむ。西蝦夷の陸行といはれるのは、どういふ仔細で、御座る」

「これまでは、多く海路を取つて、東から廻つたので御座るが、今後は、方面を變へて見たい、といふ迄の事で、別に深い考へはないので御座るが、その自由を與へて下さることは、出来すまいか」

「宜しい、御周旋申さう」

「忝けない。これで満足出来まする」

「而て、その陸行は、よほど御難儀の事で御座らうが……」

「イヤ、御心配下さるな。覺悟が御座る」

「未開不耗の地へ、深くはいることは、かねて、御経験ある事とは申し乍ら、充分の御警戒は、必要で御座るぞ」

「御心入れは、有難く存じ申す」
重藏の機嫌は、これですつかり良くなつた。それから、いろ／＼の話に打興じて、その晩は、外に何事もなく、引取つて来た。信濃守の周旋で、重藏は、三たび蝦夷出張の命をうけた。
文化元年の六月十六日、いよいよ江戸を出發することになつて、旅装の儘、重藏は、信濃守を訪ねた。信濃守は、丁寧に取扱ひ、短刀と印籠を、餞別として與へた。

五

福山へ着くと、函館奉行からの案内があつて、重藏のゆくことは、よく判つて居たから、松前藩は、固よりいふ迄もなく、土地のものが、澤山に出迎へた。そのうちに、例の渡島屋五作も居て、重藏の傍へ、寄つて来た。

「オー、五作か」

と、聲をかけられて、五作は、大地に手を下げた。

「その儘でよい」

「へー」

「何時も達者で、まことに喜ばしいぞ」

「有難う存じます。旦那様も、相變らず御壯健で、何よりで御座いました」

「最上氏も、無事に務めて居られるから、安心いたせ」

「最上の旦那様からは、時々御頼りを戴いて居ります」

「今は途上であるから、いづれ旅宿へ尋ねてまゐれ」

「有難う存じます」

出迎への群集は、兩人の立話に、目を注ぎ、耳を敬立て、居た。

五作も、今では、大きい店を有つて、持船の数も多く、先代の五作ほどにはゆかずとも、相當人に知られて、藩の御用達にも、なつて居たのだ。

藩廳の役人は、前年の事があるから、疝癩に觸れぬやうして、一生懸命に接待を爲るので、重藏は、却て之れを、五月蠅思ひ、派手な宴會などは、すべて斷つたが、只だ重役の招待にだけ應じた。

五作が、訪ねて来た、といふ知らせがあつたので、それを機會に、はやく招待された席から、歸つて来た。

「よく訪ねてまゐつた。ゆつくり話して行け」

「ハイ」

「最上氏には、よく出會ふが、お前の事は、いつも噂して居られるぞ」

「先代からの、御馴染で御座いますして、わたくしは、一方ならぬ御世話になりました。只今では、二代目五作として人様から立てられ、御役所の方からも、お目をかけて、いたゞきますので、家業は、いよいよ繁昌して、先代の時のやうに、なりますもの、もう近いうちと、考へて居ります」

「それは、何よりの事ぢや。最上氏も、世話甲斐がある、といつて、お前の事は、賞めて居られた」

「最上様の御恩は、死んでも忘れぬつもりで、御座います」

「家内も、達者か」

「ハイ、有難う存じます。御機嫌伺ひに、出ます筈ですが、何しろ五人の子持では御座いますし、それに女などが、安りにおたづねいたしては、失禮になると申して、御遠慮申す事に、いたしました」

「女子が、たづねて来たとして、別に失禮にもならぬが、いづれ歸途にでも、逢ふことにいたさう」

「旦那様は、どういふ御用で、お渡りになりましたので御座いますか」

「今度は、西海岸を辿つて、宗谷まで行くつもりぢや」

「左様ぢや」

「それは、大い事で御座いますな」

「最初は、お前の案内で、東海岸に沿ふて、國後まで行つたが、二度目は、高田屋嘉兵衛に案内させたのは、お前も知つての通りぢや。今度は、案内者なしで、獨り行かう、と思つて居るのぢやよ」

「旦那様の御氣性では、御無理も御座いませんが、西海岸の御道中は、何しろ物騒で御座いますから、ずいぶんお氣を付け遊ばして、おいてなされませ」

「どういふことを、物騒と申すのか」

「猛獸が居りますし、悪い人間が、旅の御方を脅しまして、物奪りをいたすさうで御座りますから……」

「ハツハ、ハツハ、ハツハ、左様な事は、物騒のうちにいらぬ。猛獸と申したところで、要が、熊か狼位なものぢやらう」

「ハイ」

「物奪りといへば、内地の追剥ぢや。左様なものが現れたら、蹴殺して通るから、大丈夫ぢや」

「大概な侍が、そんなことをいへば、法螺吹とも思ふが、前年の事を知つて居るから、五作は、少しも疑つて居らぬ。」

「旦那様」

「何ぢや」

「わたくしを、道案内に、お連れ下さることは、出来ませうまいか」

「それはならぬ」

「でも、御座りませうが、ぜひお連れ下さるやう、お願いいたします」

「折角の頼みぢやが、このたびは、獨り歩きと、江戸表を出る時から、定めて來たのぢやから、許すことは、相ならぬ」

「左様で御座いますか、まことに残念ではあります、それでは御遠慮申します」

「道案内のつもりで、道中筋のことを、お前の知つて居る丈け、話してくれ」

「ハイ」

「これから五作は、知つて居る丈けの事を話した。重藏は、一々それを手帳に、書き取つたが、重藏の爲めには、この上もない好都合であつた。」

六

福山を出る時も、藩廳から人を附ける、といふたのを、強ひて辭退して、多くの人に送られ、勇ましく旅立つた。途中に、大した事もなく、壽都、岩内、歌棄、磯谷を経て、明日は、もう高島へ着かう、といふ日の夕ぐれであつた。

その時分の事であるから、住民も、未だ少なく、岩内邊りでも、僅かに五六十人の移住者と、アイヌの群れが、百人近くもあつて、離れくに家を構へ、山に海に、働いて居るのであつた。

海岸寄りて、漁業が、さかんなところへゆくと、そこには、内地人の部落の如きものもあつて、可成りの賑はひを見て居た。

五六十人位の部落には、以前から、藩の會所や、番小屋もあつて、鹿末ながら驛宿の如き、家もあつたから、汚ないことさへ忍べば、どうか斯うか、泊る事も出来た。

『旦那ツ、いよ／＼高島へ行くのかな』
 と、一人の男、その服装からすれば、海の労働を、爲て居るものらしい。
 ところは、雷電峠に近い、或小さい漁村であるが、重蔵に向つて、しきりに、途中の危険を語り、明日に延ばせ、
 といふて、注意をして居るのが、漁夫風の男であつた。

『折角、思ひ立つたのぢやから、行く事にいたす』
 『左様ですか、それぢやア無理には、引留めねえが、ずるぶん氣を付けて行きなせえ。ツイ近頃にも、ひどい目に逢つて、死んだものもあるのですから……』

『お前が、親切に、いふてくれるのは、千萬忝ないが、拙者には、充分に覺悟もあるから、行くことにいたさう』
 『それにしても、途中で、日がくると困らうから、提灯を持つて、ゆきなさい』

『イヤ、それも用意はある。それ此通り、持つて居る』
 と、いひ乍ら、小さい壘み込になる、提灯を出して見せた。
 『なる程、長い旅のことですから、その位みの御用意はあるでせう、が、蠟燭や燧石の方は、どうですな』
 『今宵のところは、持合せて居る丈けて、充分と思ふが、明日のこともあるから、少し分けて欲しい』

『承知いたしやした』
 蠟燭と、火の用意をして、それから重蔵は、その漁村を離れた。
 忍路、高島およびもないが
 せめて歌棄磯谷まで

土人の哀歌として、今の世に迄傳へられて、追分節といへば、これに極まつて居るほど、世間に聞えた歌である。
 近頃の北海道へ行けば、もう昔の狀が残つて居るところは、甚だ少なくなつて、殆んど内地の如くなつてしまつた

が、それでも、人家の少ない、山村や海岸へ行けば、どことなく、荒寥の跡は、残つて居る。
 併し、三十年前と比べて、その發展の狀は、驚く可きほどである。今の高島を見て、三十年前の高島を想ふてさへ
 無量の感慨に、うたれるものがある。

はやくから、開けて居た、函館でさへ、最近の發展は、夢のやうにも思はれる。小樽の町の廣がつたことは、只だ
 驚くの外はない。

大きい都會の地と、小さい町の間に、點々として居る、山村や漁場のやうな所でも、土地相應に、大勢の人が入り
 込んで、生活の競争で、目まぐるしいほどに、駈け廻り乍ら、働いて居る。

汽車が、縦貫的に通じてからは、未開の土地へ、ドン／＼内地から移つてゆくので、二年も御無沙汰をして居ると
 荒蕪の地が、何時か町の形をなしてしまふ。

文化の頃の高島、それは僅に一漁村にすぎなかつた。内地のものは數へるばかりで、多くはアイヌの働く所として
 只だ哀歌に現れた名が、内地のものを、引付けた位に過ぎなかつた。

森林の深く、峻しい山道は、必ず連れのものをつくつて、幾人かにならねば、容易に通れるものでなかつた。
 猛獸の害も恐ろしいが、悪い人間の襲ふのも、矢張り恐ろしい事の一つであつた。殊に、雷電峠の物騒なことは、
 一たび蝦夷へ行つた者は、人の噂でも、知つて居るほどであつた。

峠の下で、日はくれてしまつたが、例の小提灯に、火を入れて、重蔵は、只だ一人で、峻しい、坂路を登つてゆく。
 時は、今夏の盛りであるが、夜に入ると、寒さを感じるほどに、氣候が變る。それが、深い山になると、一だんと
 はげしくなるのであるから、大概なものは、努めて夜の道中は、避けるやうにして居た。

體も、丈夫だが、足も、達者な人で、腕には、自分ながら頼むところがあつて、心膽の練れて居る爲めに、物恐れ
 といふことが無かつた。それにしても、自然に襲ふて来る、寒暑には艱むことがある。

やうやく、峠へはかゝつたが、寒氣の爲めに、手足が凍えるやうになり、體も、非常に冷えて來たので、先づ一と休みしてゆかう、と、大樹の根方に、腰を下ろして、枯枝や落葉を集めて、焚火をして暖を取るうちに、體が温かになると、しきりに、眠氣を催して來たので、フラ／＼居眠りを始めた。

七

重藏が、居眠つて居る、前の森林が、ガサ／＼と音を立て、動いた。疲れて、居眠つては居るのだが、魂迄は、眠つて居らぬ。重藏は、不圖眼をさまして、ぢつと見詰めた。

大きな熊が、ノソリ／＼と這つて來るのだ。眞ッ暗な中で、黒い物が、動いて居る丈で、眼玉ばかりが、光つて居る。大膽な重藏は、眼を細く閉ぢて、居眠つて居る、眞似をして居ると、熊は、徐々近づいて來た。

枯葉を集めて、それを蒲團代りに、どツかり胡座を組んで、大きい石に寄りかゝつて、居眠つて居るのだ。熊は、その周圍を、しきりに廻つて居たが、やがて、兩足を開いて、重藏の軀を、抱き込もう、とした刹那に、むツくり立ち上つた重藏は、拔手も見せず、小刀を、熊の下腹へ、刺し込んだ。

「あツ」

と、叫んで、熊は、後足で立つた。

熊が、あツと叫ぶのも變だが、立つた儘、チヨコ／＼と、歩き出した。

重藏は、追ひすがり乍ら、

「エイツ」

と、氣合を、かけて蹴る。

同時に、熊は、どツと音をさせて、横さまに倒れた。

「ビユツ」

風を切つて、飛び來る矢一筋、危く身を替して、重藏は、その場に倒れ、息を殺して、待ちうけた。

所へ、森林を押分けて、ぬツと現れた、一人の大男がある。山刀を腰に、二た筋の矢と、弓を携へて、顔は、黒い巾で、包んで居るから、よく判らないが、この邊に巢をくつて居る山賊に違ひない。

熊が、倒れて居るのを視て、そばへ寄ると、引越し乍ら、

「平次郎ツ、しツかりして居ろ、仇は、今、すぐに討つてやるぞ」

と、いふた時、熊は、軽く首肯した。

彼の男は、熊を、そツと寝かして置いて、山刀を引抜いて、重藏の傍らへ、進んで來た。始終の容子を、見て居たので、重藏は、甚だ不審に思つた。

何か知らぬが、深い仔細のあるに違ひない、と見て、不意に起き上がった。

「ヤツ」

と、切りつけるのを、重藏は、右へ避けた。つゞいて切りかけて來るのを、左右に、替して居たが、僅かの隙を見て

手元へ、ずツと進んだ。

刀は抜かず、携へて居る、鐵扇を揮つて、其奴の小手を、強く打つた、すぐに組付いて來るのを、軽くうけて、投げ飛ばした。

起き上らう、と爲るのを、しツかと、抑へつけて、

「何者だ、仔細を語れ」

「……………」

膝に、力を入れて、ぐツ／＼と抑へつけるから、組敷かれた奴の苦しさは、一と通りでない。

「恐れ入りました」

「何と申す」

「もう、お手向ひは、いたしませぬゆゑ、その御手を、緩めて下さい」

「よし」

重藏は、抑へた手を放して、後へ退つた。

「御勇力のほど、恐れ入りました」

「其方の望み通り、手は緩めて遣はしたが、全體、この狼藉は何事だ」

「……………」

「根からの物奪りとも思へぬ。これ迄に身を落すには、深い仔細もあらう。それにいたしても、不思議に思ふは、その熊であるが、はやく手當をいたしてやれ」

「熊は、もう駄目で御座います」

「何ッ、駄目とは……………」

「貴下様に、切りかける前、引起して見ましたが、呼吸は、絶えて居りました」

「左様か」

「而て、貴下様は……………」

「公儀の御用を帯びて、高島へ行く途中である」

「失禮乍ら、御姓名は……………」

「近藤重藏と申すものぢや」

「えッ、近藤様で御座いましたか」

「拙者を、知つて居るか」

「御尊名は、かねて伺ひ居ります」

「拙者の姓名を、知つて居る、といふからは、其方も、士分のものであらうが、名は何と申す」

「わたくしは、出羽庄内の浪人、正木平太夫と申すもので御座います。その熊は、弟の平次郎でございます」

八

「那の熊は、お前の弟か」

「左様で、御座います」

「それは、氣の毒な事をいたしました。些と、深傷のやうであるが、はやく手當をいたして、遣はさう」

「立上らうとする、重藏の袂を抑へて、」

「もう、いけません、呼吸は、絶えて居ります」

「左様か」

「兄弟兩人で、斯ういふ穢きをして居たのですから、何時か天罰の下ることは、止むを得ぬ次第であります。名も無きものゝ手にかゝらず、貴下のやうな、高名な人物の手に、かゝつたのは、まだしも、本人の仕合でありますから、少しも残念とは思ひませぬ。わたくしも、貴下の手にかゝつて、弟の跡を逐ひたく存じますから、どうぞ御支配下さいませ」

と、平大夫は、重藏の前に、首を差延べて、覺悟の態であつた。

重藏は、しばらく考へて居たが、

「お前も、根からの悪人ではなからう。出羽の庄内といへば、酒井侯の御領内であるが、どうして斯様な、身の上に

相成つたのか、差支へなくば、其仔細を語つて、貰ひ度い。その上にて、拙者の考へもある』
『ハツ、恐れ入りました。それでは一通り、御話申上げませう』
正木は、これから身の上話をはじめた。

『領主の酒井侯は、賢明な殿様で、決して不仁の政治を、布くやうな御方ではないが、郡代を勤めて居るものに、心のよくないものが居て、領内の百姓を虐げ、苛斂誅求を事としたので、いくたびか訴訟を起して、藩廳の決裁を仰いだ。だが、その郡代の妻が、藩の重臣の娘である所から、訴訟は、すべて百姓の負けとなり、却て其れが爲めに、入牢するものもあつて、百姓の窮状は、目も當てられぬ有様であつた。』

正木平大夫は、郡代の下に、使はれて居る、小役人ではあつたが、百姓の苦しみを察し、郡代の悪政を嘆き、しばしば諫言はしたけれど、終に用ひられなかつた。

其處で、役を辭して、家に引籠り、いくたび迎ひが來ても、出て行かなかつた。然るに、郡代は、之れを不都合として、正木の役を取上げ、その屋根にさへ、住むことを禁ずる、といふことを申渡したので、正木は、止むを得ず附近の小さい家を借りて、それに引移つた。

丁度、この時分に、百姓は、入牢して居る、總代の爲めに、寄々相談の末が、郡代の役宅へ押かけて、腕づくでも總代を、取戻さうといふことになつて、それ／＼用意にかゝつたが、正木の事を聞いて來たものがあつて、いよいよ其儘にはすまされぬ、と、一同は、先づ正木の家へ、集まつて來たので、終に正木は、百姓の爲めに、百姓はまた正木の爲めに、互の眞情から一致して、郡代の役宅へ、押かけて來たのが、一揆の形になつて、その騒ぎは、一段とひどくなつた。

始めは、それほどの考へでも、なかつたのだらうが、群衆心理といふものは、まことに妙なもので、多勢の人が集まれば、思はざることまでも、やつて退ける。世にいふ暴動なるものは、多く左様した場合に、始まるものである。

が、一應は、總代の釋放を、迫つて見たが、それは、終に容れられなかつた。
百姓等のいふところにも、無理な點があり、郡代等の應酬にも、權柄づくのところがあり、トウ／＼群衆は、暴動化して、役宅へ火を放ち、郡代を殺してしまつた。

その結果は、多くの百姓が捕はれて、騒ぎは一先づ鎮まつたが、正木兄弟は、藩の捕吏と闘つて、行方をくらまして、それから、嚴重に搜索もされたが、巧に遁れて、船の生活をして居るうちに、難風の爲め、蝦夷へ流されたのを幸ひとして、その後所定めず、昨年来、この地にかくれて、苦し紛れの物奪りに、身を墮したのである』

と、これ迄は、平太夫の物語りであるが、それを聞いて居た、重藏は、いくたびか、嘆聲を漏らした。
『初めは、百姓の味方として、一片の義心から、弱きものを扶けよう、といはしたにも不拘、その手段を誤つた爲めに、日蔭の身となり、今は、野盜に迄、身を墮して、良民を苦しむるとは、何といふ淺ましいことぢや。悪事の酬みは、己れが弟の最期と、なつたのである。併し、力の及ばざるを知つて、潔よく首を、差延べた覺悟は、さすがに、武士の心は、未だ残つて居るのぢや。この上に、お前の生命を奪つたとて、それが何の爲めになる、といふでもない。拙者の意見に従つて、元の善心に立戻る、といふならば、どこまでも、世話をして遣はすが、どうぢや』

『恐れ入りました。お詞に従ひまして、貴下の從僕と相成り、どこ迄も、公儀の爲めに、盡したく存じます』
『よし、その一言を信じて、世話を、いたして遣はさう』
『有難う存じます』

九

人間の性は、元善である。

生れ乍らの悪人、といふものはない。善人として生れたものは、何等かの動機で、不圖悪を働かやうに、なるのだが、さればとて、悪になり切るものは、絶無といふて可い。

悪い事を、働いて居るうちに、それが、何時の間にか習ひとなつて、悪いといふことは、よく知り乍らも、自省心が、乏しくなつて居る爲に、之れを救ふ人のない限り、悪をつづける丈の事であつて、その悪を、働いて居る間も絶えず良心の刺激は、うけて居るものだ。

平太夫も、即ち其れであつた。弟の平次郎は、熊の皮を被て、道行く人を、脅して居たのであり、手に餘るものは殺しもして居たのであるが、苟も人間として、動物の眞似をして、旅人の懐裡を掠める、といふのは、實に情ないことであつた。

それ迄に墮落しても、元は、武士であるから、何かの動機で、悔悟の時は来るので、あつたらうが、不幸にして、重藏の手に斃れてしまつた。若し、生きて居たら、兄の平太夫と同じやうに、重藏の意見に従ひ、純な人間に立戻つて、世の爲めに働いたであらうに、まことに、惜しいことをした。

平次郎の屍骸には、枯木や落葉を、積み重ねて、火を放け、一片の煙りにしてしまつた。

平太夫は、涙をかくして、

『これで、平次郎の始末もつきました。この上は、御供をいたして、いづくの果までも、まゐりますが、わたくしは貴下のお情に依つて、心まで蘇生りました。この邊のアイヌは、可成り人数もあります、その酋長は、チコモタインと申しまして、實に立派な人物であります。私から御紹介、申上げたう存じます』

兩人は、ひとしく立上つた。所へ、一と群のアイヌが、高聲に、何か語り乍ら、やつて來た。やうやく旭日が、曉の雲を破つて、その姿を現した。鬱蒼たる森林の間から、輝々として光が流れて來る。

『オー、正木さまか』

『やツ、酋長……』

平太夫は、重藏を顧みて、

『この者が、チコモタインであります』

『左様か』

さらに、平太夫は、チコモタインに向つて、

『この御方は、近藤重藏さまといふて、日本無双の勇士である』

之れを聞いて、チコモタインは、重藏の前に、跪いて敬禮した。

『シヤモの大人、わたくしは、大人のおいでを、長くおまちいたして居りました』

『拙者を、待つてゐたとは、どういふ次第か』

『福山の五作さまから、そのお知らせがありました』

『ゑツ、五作から知らせがあつた、といふのか』

『ハイ』

『ふふーむ』

渡島屋五作は、重藏の出達と共に、急使を發して、沿道の酋長へ、それ／＼知らせを、出しておいたのだ。

チコモタインの案内で、その部落へ、連れて來られた、配下のアイヌも、多く集まつて來て、重藏を敬することは非常なものであつた。

數日、滞在の後、重藏は、平太夫を連れて、石狩へ向ふことになつた。海岸に沿ふて、小舟をあやつり乍ら、石狩灣へはいつた。それ迄の道中には、格別の事もなかつたから、すべて簡

略に、物語をすゝめる事にしよう。

兩人は、相談の上、石狩川の流れを、さか上つて、その沿岸を、探險することになつた。

兩岸の風光は、内地に、よく見る風光とは、全く異つて、太古のまゝの森林は、川を壓するか、と思ふばかりで、名も知れぬ草花が、流れに臨んで、咲いて居る。

或は、流れをさか上る魚、或は、舟を逐ふて、群がり集まる魚、手を差延べて、たやすく掴み得るほどに、魚は、未だ人間を知らないのである。

舟を、あやつるものは、平太夫であるが、五年あまりも、高島に居て、小舟を、あやつることは、頗る上手であるから、重藏も、安心して居た。

トヒノタツプと、いふ所まで来た。

この邊は、川底に、岩石が多いと見えて、流れが激して、所々に、渦を巻いて居る。それを避けて、巧みに小舟をあやつつては居たが、始めて、さか上る、流れの事として、平太夫は、棹を突いて、舟を廻さうとした時、誤つて棹と共に、川へ落ち込んだ。

『危ないッ』

と叫んで、重藏が、舟から半身乗出して、平太夫を抑へよう、とした刹那、舟は、くるりと覆へつて、重藏も、流れに吸ひ込まれてしまつた。

一〇

『十州島の中央に在り、山野の廣大、之に比す可きなし。その札幌は、即ち北海道廳の在る所にして、廳下の市巷を一區と爲し、支廳は、札幌、空地、上川の三治に分たる。面積九百方里、今、人口五十萬、其物産、農業一千五百

萬圓、工業六百三十萬圓、石炭六百萬圓、及び漁撈收音數十萬圓、大約、全道の歳産、十分の四は、此一州に屬す盛大知る可し』

新しい地誌には、斯う書いて在る。

また、北海道志には、

『石狩國は、十勝、釧路に界し、南は膽振、日高に接し、西は海に面し、北は天鹽國と分界す。東西凡て四十三里、南北凡そ二十五里、地勢、南頭狭く、北邊廣く、曠原斥澤にして、丘壑なく培塿なく、土塊石礫なし、所謂蕩(沼)なるもの大小數十、大河其中を貫き、匯りて蕩となり、流れて河となる。』

東北三面の山、遠く其外を繞り、天際波濤の起伏する如し。空知郡留宇知志は、是を十勝石狩東西の分水嶺と爲す石狩の川、春秋魚漁の盛んなる、全道に甲たり。河流を浜り、千歳川より勇拂に出れば、東海の濱に達す可し。

實に四通八達、天府の地にして、且、全道の奥區に位す。

昔、幕吏の此に來るや、嗟賞して以て建都の所と爲す。松前氏の時、石狩領、厚田領、濱益領を設け、分て家臣の采邑とす。皆運上屋の設けあり、文化四年、函館奉行に隸し、文政四年、松前藩に復し、安政二年、再び函館奉行に隸す』

と、記してある。

別の地理書を、調べて見ると、

『石狩平原は、最も廣大にして、十勝、釧路、根室の三國に跨れる、高原に亞げり。海濱より起りて、川上郡アイベツ地方に至り、長三十七里、幅五里餘、其殖民遂定地五億坪あり、就中、三億二千萬坪は、最も耕耘に適し、二億二千萬坪の泥炭地は、改良を加ふるを要す、と云ふ。その下流の地は、土壤深しと雖、卑濕に過ぐるものあり、上流の地は砂礫露出し、往々乾燥に失す。其地層は、古沖積新沖積の二大別に過ぎず、古沖積は、高臺の地を占め、

平原を抜くこと六尺乃至八十尺に至る。新沖積は、河畔の平地に位し、褐色を呈し、上流に向いて、漸く薄し、此上下の区分は、専らカムイコタンの險峽に由る』
斯く認めて在つた。

いづれにもせよ、石狩は、よい土地である、といふことに、歸着する譯である。

重藏と平太夫が、落ち込んだ、石狩川の事に、ついては、

『源を上川郡の奥、十勝國境なる石狩嶽に發し、上川郡の平原を流れ、比布川、ウシシユ川、テユブ川、美瑛川等を併せ、神居古潭の險峽を過ぎ、中遊となり、雨龍川を容れて、大に水量を増し、下遊となり、江別に至つて、夕張川を容れ、西轉して札幌の北を經、遂に海に入る。蜿蜒一百里、本道第一の大河たるのみならず、亦實に我國屈指の長江たり、所屬域一千方里と稱す』

と、書残されてあるから、その大河たることは、改めていふ迄もない。

例年、十月に入れば、著しく寒さを増して、はやい時は、もう雪を見ることがある。月の末から、十一月の初めには、確實に雪が、降り出すのであるから、夜に入つて、長く川の中に居れば、手足は凍えて、自由を失ふのである。激流の爲めに、三里餘り押流されて、やうやく大きい石に觸れて、それに取付き、ほつと息を吐いた。

日は、全く暮れて、月は、高く昇つて居た。

負けじ魂の重藏も、今は疲れ果て、體は、綿の如くなつてしまつた。寒氣は、骨を刺して、手足の自由は、丸で利かず、只だ一身の力を、双腕に入れて、石に獅嚙ついて居る、丈けの事であつた。

月は、天心に高く、寒さを咬るかと思ふばかり、その光りを、浴びせかけて居る。

遠く聞える漁歌は、切々として、哀調深く、半死の重藏には、腸へ泌み透るのであつた。

酋長と思はれる、老人を先頭に、その跡から、ゾロ／＼尾いて、一と群れの土人は、川沿ひに近づいて來た。

『オー、人が居ります』

『ヤツ、溺れる人か』

『イヤ、助かつたのぢや。那の大岩に縋つて居るのは、流されて來たらしい』

『救ふてやれ』

『それが、よからう』

長い綱をつけて、一隻の小舟、それは、例のくり舟であつた。流れに取られまいとして、その綱を、二人のアイヌが、しつかりと掴んで居た。

一一

斯くて、重藏は、アイヌの一群に、救ひ上げられて、その部落へ、連れて來られた。

シヤモのサムライだ、といふので、その取扱ひは、實に親切なものであつた。醫者も無ければ、藥らしい藥もないが、人の親切は、醫者や藥よりも、よく利くものだ。

殊に、是といふ病氣でなく、負傷も、極めて軽く、流され乍ら、石や岩に當つて、多少の打身と、擦傷がある位のものであるから、存外には、はやく生氣も回復して、二日餘りて、元の體になつた。

元來が、剛氣な男で、體格も、人並すぐれて強く、武藝で鍛へ上げてあるから、此位の事で、凹垂れるやうな譯はなく、元氣よく話をはじめたのが、三日目の夕方であつた。

此部落には、八十人餘りのアイヌが居て、その酋長は、シヤラセンといふて、その仲間では、頗る古く、名家の主入であつた。

松前藩の番屋が、早く設けられて居たので、思ひの外、詞もよく、解つて、一と通りの話には、さらに差支へな

つた。

重藏の身分を聞いて、彼等の尊敬は、一だんと厚くなつた。

『大した負傷がなくて、まことに結構でした』

『お前等の救ひを得て、生命を拾つたのぢや、わしは、嬉しく思ふぞ』

『旦那様の武勇と、神様の御力で、斯ういふことに、なつたのであります』

『神の力も、偉大なものではあるが、お前等が来てくれたから、わしは、救はれたのである』

『それが、神様のなされたことであります』

未開の地に、太古の儘の生活を、して居るものは、神に對する信仰が強い。シヤラセンが、今いふて居ることは、

一片のお世辭でもなく、また殊更の有難話でもなく、彼等は、全く左様信じて居るのであつた。

『これから、どこへ、行くのでありますか』

『宗谷の方へ、行くつもりぢや』

『多ツ、宗谷へ……』

『うむ』

『彼地に居りますものは、みな引上げて来る頃に、彼地へ、おいてなさるとは、驚き入りますが、どういふ御用で、御座いますか』

『別に、これと申すほどの用事もないが、唯だ彼の地方のことを、よく視て來たいと思つてぢや』

『これからは、一日々々と寒くなりまして、もう早いところは、雪が深い位でありますから、とても宗谷までは、むづかしいでせう』

『併し、行けるところ迄は、行くつもりぢやよ』

『シヤモのサムライは、みな強いから、さういふ事をなさるが、こればかりは、無理だと思ひます』

シヤラセンは、しきりに行路難を説いて、重藏を、引留めようとしたが、重藏は、その忠告を斥けてしまつた。

重藏の考へは、宗谷へ、行く交けてなく、都合さへ巧くついたら、海峽を渡つて、樺太まで行く覺悟であつた。

『わしには、連れのものが一人あつて、それも川へ落ちたのぢやが、どうかして捜し度い、と思つて居るのぢや』

『旦那様が、初めから連れのあつたことは、一言おツしやつたので、わたくしの方で、それ／＼へ傳へてありますから、見付け次第しらせが、御座りませう。併し、日が経つて居りますから、萬一の事がなければ、よいが、と思つて居ります』

『どうかいたして、救ふてやりたいものぢや』

話合つて居るところへ、賑やかな人聲が聞えて、やがて一人のアイヌが、ズツと、はいつて來た。

『酋長ツ』

『オー』

『もう一人のサムライを、案内して來ました』

『助かつたか』

『へー』

『それは、可かつた』

重藏も、思はず立ち上つた。

ところへ、平太夫は、左の足を、少し痛めたものか、跛足を曳き乍らはいつて來た。

『やア、正木ツ』

『先生』

平太夫は、重藏を、先生と呼んで居るのだ。
 「無事で、よかつたな」
 「先生も、御無事で……」
 強い人にも、涙は有る。
 二人は、手を握つて、泣いた。
 七日餘り世話になつて、二人は、いよいよ出立することになり、なつた。途中まで、シヤラセンと部落のものが送つてくれた。

大鹽平八郎と重藏

一

高島から、小樽灣を横斷して、石狩へ、はいつたことが、非常な冒険であつて、普通の人には、容易に爲し得ることでない。
 さらに、石狩川を遡上つて、空知の方面へ出よう、としたことは、一層の冒険であつた。
 果然、この川昇りは、終に失敗してしまつた。幸ひにして、シヤラセン一族のものに救はれてから一命は完うしたが、どこまでも剛氣な重藏は、これから宗谷まで、海岸を沿ふて行かうとするのであつた。
 殊に、寒さに向つての企ては、あまりに、亂暴であつた。暑い時に出かけたものが、急いで引上げて来る、といふ時分に、その寒さに、向つて行くのであるから、シヤラセン等が、詞を盡して、引留めようとしたのは、決して臆病からでもなければ、また無理でも、なかつた。けれども一たん思ひ立つたことは、突當るまで、やつて退けるのが、重藏の氣性であるから、至難しいと聞いては、猶更ら止めることはしない。
 従いてゆく、平太夫も、亦一廉の男であるから、重藏のいふが儘に、同行するのであつた。
 増毛、留萌、苫前、稚内を経て、いよいよ宗谷へ着いたのは、約一ヶ月も、要つて居る。
 途中は、風雪の艱みを凌ぎ、猛獸の襲來に、いくたびか危きことがあり、何分にも、雪の深いには、非常に苦しん

だ。
食物や寝起にも、頗る弱つたのであるが、どこの部落へ行つても、土人の歡待はうけた。これが、此行を扶けた。唯一のものであつて、純眞な土人の心には、重藏も、少からず喜んだ。

『宗谷は、北見の最北端にして、又、實に蝦夷の北端たり。東北西の三面は、海をめぐらし、南は枝幸郡、及び天鹽國天鹽郡に接す。東西十五里、南北十四里、面積八十八方里、宗谷支廳の所轄にして、廳治は、稚内に在り、宗谷濃沙布の二岬突出して、一大灣を擁し、宗谷の岬は、樺太近藤岬と相對峙して、險峽を成し、其距離十三里に迫る。郡の中央に、多少の丘陵あるも、波狀の起伏にすぎず、南東部最も平坦にして、蘆原茅原多し、道路は、海に沿ひ、概ね平坦なれど、宗谷より東六里の間は、處々斷崖を成し、暴浪の日は、人馬の往來を絶つ』
と、最近の地誌には、書いてある。

今では、宗谷、稚内を中心として、一郡を成し、どちらも、一小市街をつくつて、樺太へ渡るには、要衝の地になつて居るが、今から百年前の當時、内地の人は、どこへ行つても、多く其姿を見せず、全く交通の便は、なかつたのであるから、その困難は、歩くにしても、留まるにしても、非常な事であつたのは、改めていふ迄もなからう。

幾多の困難を凌びて、宗谷に着いた重藏が、もう一步、ふみ出して、對岸の樺太へ渡らう、と考へて居たのだからその大膽には、驚くの外はない。

雪の霽れ間には、海岸の岬角に立つて、遙に對岩を睨んで、太い息を、漏らして居たのだ。

風は強く、浪は荒て、とても渡海の望みは、絶え果てた。雪は、霽れることがあつても、風は強い。風の止んだ時は雪が降る。風雪共に到る時は、眞に咫尺を辨じ得ぬほどであるから、いかに奮發しても、これ丈は、重藏の自由にならなかつた。

『正木ツ』

『ハイ』

『もう斷念めた』

『駄目ですか』

『第一に、船がない。假りに船があつても、この風浪は凌げぬ。殘念ながら、引上げる事に、いたさう』

『……………』

『拙者も、今迄は、凡そ天下の事として、成し能はぬ事は無い、と考へて居たが、これ丈は、いかんともいたし難い、と斷念がついた』

『それでは、引上げの支度に、かゝりませう』

『うむ、どうか、さうしてくれ』

『承知いたしました』

五人のアイヌを雇つて、食料品を荷はせ、道案内として、連れて行く事にした。降る雪に、道を絶たれて、殆んど

方角も、判らぬほどであるから、土地のアイヌを、頼む外はなかつた。

行く時に比べて、歸る時の方が、却て苦しんだ、といふのは、無理もないことである。

福山へ着いて、ほつと一息した。

重藏は、一人で歸るつもりで居たが、例の平太夫が、ぜひ連れて行つてくれ、といふので、伴れて歸る事にした。

一一

上司が、下僚に對しては、一視同仁でなければならぬ。いかなる、場合にも、依怙偏頗の沙汰など、決して爲す可

きものでない。けれども實際に於ては、何時の世にも、それが行はれて居るのだから、實に嘆かほしい、次第である。武家といふ階級が、町人百姓に對して、非常な權力を、有つて居た上に、役人といふ役人は、すべて、武家の占有するところになつて居たから、その威張り方は、非常なものであつた。

武家であり、且役人である、といふことが彼等の間に、どれほど、幅の利いたものか、それは想像も及ばぬ。

今ていふところの官尊民卑、その風習は、未だ容易に除かれず、國民の代表者たる、議員の席にあるものでさへ、役人になりたがることは、ます／＼、ひどくなつて來た。

大臣は格別として、その以下の役人に、なつた議員が、閣下といはれて喜んで居ると、いつた、情ない状態は、何時の世になつたら、無くなるであらうか。

莫迦な國民は、閣下といふて、左様した人に近付くのを、無上の光榮と、心得て居るものも、少なからず在るほどだ。

この陋習は、武家政治の名残であつて、まことに見苦しい事であり、ひどい弊害が、之れに伴ふて居ることに、はやく氣付いて欲しい、と、常に思つて居るが、ナカ／＼其夢は、覺めさうに思へぬ。

幕末の太平に、武家の人々が、役人になることを樂しんだのも一つの時代相、と、觀て可からう。役人になれば、その肩書に依つて、無役の武家に對して、非常に威張れる、といつたことが、今の官尊民卑の風を、助長させた本源である。

同じ役人のうちでも、上司と下僚、之れが亦甚だしく、隔たりのあつたもので、上級の役人は、大した權力を、下級の役人に對して、有つて居たものだ。

それであるから、上司の御機嫌に觸れたら、下級の役人は、すぐ叩き落されてしまふ。

松平信濃守は、よく下僚を憐んで、親切に世話をした、人であつた。

近藤重藏が、上司に對して、無遠慮に、自説を固執するので、誰れも、快よく思つて居なかつたが、獨り、信濃守のみは、重藏の爲人を、よく知つて居て、之を上手に使つたから、狷介にして不屈の重藏も、此人にだけは、極めて柔順であつた。

重藏が、無事に歸つた、と聞いて、信濃守は、すぐに呼んで、北邊探險の事情を、くはしく尋ねた。

聞く事毎に、信濃守は感心して、

「足下なれば、こそちや」

と、いつて、しきりに推賞した。

重藏は、膝を進めて、

「就きましては、些と御願ひの次第が御座ります」

「何事ぢや」

「只今、申上げました正木平太夫、このたび同道いたしましたについては、酒井侯の領内を、騒がした罪のあります爲めに、必ず厳しい御咎めも御座りませうが、この儀につきましては、貴下の御手加減にて、いかやうにも相成る事と存じますが、同人を救ふて、公儀の御用に立てる工夫は、御座りますまいか」

「よし、その儀については、拙者が、よく呑込んで置く」

「ハハツ、有難き御詞、厚く御禮申述べます」

「本人に、一度逢ふて見たいが、そのうちに、機會を見て、同道いたして貰ひ度い」

「御沙汰を待ちまして、何時にても同道いたしませう」

此事についても、信濃守は、重藏の義氣に感心した。自分が、それだけの事をして、歸つて來たのに對しては、別に、誇る容子も無く、その功を犠牲にしても、平太夫を、救つてやらう、といふ心は、見上げたものだ、と、思つた

から、たやすく平大夫の一身を、引受けたのであつた。
 数日の後、平大夫は、信濃守の役宅へ引取られて秘書の役を勤めるやうになつた。平大夫の喜びは、固よりいふ迄もない、重藏の恩義に對しては、深く感銘して、弟の平次郎を、殺された怨みなど、寸毫も、考へて居なかつた。
 所が、茲に意外の事は、重藏が、俄に書物奉行に、轉任された事である。
 重藏の心では、さらに年を越えて、宗谷の海峡を渡り、樺太へ乗込んで、多年の志を、成すつもりであつた。然るに、書物奉行になつたのでは、その望みは、絶えた譯である。
 今でも、圖書館長になる人は、霸氣の無い、功名心を捨てたものでなければ、絶対になり得るものでなく、何か行つて見たい、といふやうな人は、決して喜んで就く可き、役ではない。
 重藏の不平は、實に非常なものであつた。信濃守の斡旋も甲斐なく、上司の憎むところとなつて、敬遠されたのである、と、いふことが判つたから、いよく不快に思つて、勤めも怠り勝てあつた。間もなく、大阪の弓奉行に、轉任を命ぜられた。
 於此、重藏の不平は、いよく爆發して、容易に受ける容子の無かつたのを、信濃守が、しきりに宥めて、とに角、大阪へ出發させる事にした。

一一一

文政二年の春、重藏は、滿腔の不平を抑へて、大阪へ赴任した。
 蝦夷や樺太に、深い考へを有つて、大いに爲すところあらん、とした場合に、大阪の弓奉行とは、いかにも、意外の感があつて、重藏の氣性としては、容易に、之れを受けなかつたのは、當然である。
 けれども、自分を、よく知つて居る、松平信濃守の慰諭もあり、旁、他日の復歸を夢みて、厭々ながら赴任したに

すぎなかつた。
 されば、役所へこそ出ても、ほんの出る、といふ丈けのことで、多くは、自邸へ引こつて、讀書三昧に、日を送つて居たのである。
 當時、大阪には、一人の怪物が居て、重藏の赴任を、心ひそかに待つて居た。それが、例の大鹽平八郎であつた。
 平八郎の出生には、種々の説はあるが、廣く傳へられて居るのは、阿波國美馬郡岩倉村字新町、といふことになつて居るが、石崎東國の大鹽傳には、天満川崎の四軒町に生る、とあつて、この方が正しい、と思ふ。
 父は、平八郎敬高と稱して、家は、天満與力を世襲的に、勤めて居た。祿は、二百石三十俵を得て居たから、左迄に貧しい方ではなかつた。
 幼名は、文之助と謂ふて、東町奉行詰所へ、與力の見習ひとして、出るやうになつたのは、文化三年のことで、十四歳の時であつた。
 七歳の時、父を亡ひ、平八郎の名を亞ぐ。その翌年に、母を亡ふて、家庭的には、甚だ恵まれぬ人であつた。
 篠崎應道の門に入つて、句讀をはじめたのが、父を亡ふた歳からで、十二三歳の時には、既に四書五經はいふ迄もなく、經史の大體に通じた、といふから、よほどの秀才であつたに、違ひない。應道は、小竹の父である。
 一日、篠崎の塾から、歸つて來ると、天満橋の畔に、多くの子供が、遊んで居るのを見て、その中へ飛び込み、しきりに遊び戯れて居たが、折しも、附近に outbreak があつて、代官の篠山十兵衛が、部下を率ゐて、火元見の爲め、駆けつけて來た。
 篠山は、馬上で聲をかけ乍ら、橋へかゝつた時、多くの子供が、遊び戯れて居るのを見て、
 『子供は危ない、退け！』
 と、いつて、聲を限りに叫んだ。

子供等は、之に驚いて、みな逃げ出したが、唯だ一人、どうしても動かずに、馬上の代官を見て、ニコ／＼笑つて居るから、部下のものは、その傍へ寄つて、

「これツ、何故退かぬか」

と、いひつゝ抱き上げて、襦袢に持ち出した。その際に、代官の一行は、火事場へ急行した。

抱寄せられた子供は、平八郎であつた。

火事は、大した事にもならず、僅かに十數軒で焼留まつたから、代官は、役所へ引揚げよう、として、天満橋へかかると、不意に横合から、長い竿を突出して、前列の部下が、高く掲げて居る、提灯を、叩いた奴があつたので、は

つと思ふ間もなく、提灯は、大地へ落ちた。

「不埒なツ、引ツ捉へろ」

と、代官は、大きな聲で下知した。

部下のものは、バラ／＼とかけ出す。向ふの闇いところを、非常な早足で、駆けてゆく子供があつた。

子供の逃足はやく、終に捉へ得ず、代官の一行は、とに角、役所へ引揚げて来たが「苟も代官の提灯を、打ち落す

とは、怪しからぬ奴だ。草を出けても、捜し出せ」と、いふことになつた。

その子供が、平八郎であることは、すぐ判つた。代官は、烈火の如く、怒つて居るのだが、普通の子供と違つて、

天満與力の子供とあつては、みだりに、手を附けられぬので、その親元へ、一應は掛合ふことになつた。

兩親を、亡ふた平八郎は、祖父政之丞の手に、育てられて居た。

「平八ツ、ちよいと、來なさい」

「ハイ」

「お代官の提灯へ、無禮を加へたことがあるか、どうぢや」

「……………」

「左様いふことを、した覚えはないか、若し、あつたとすれば、一大事ぢや。よく考へて、返辭をしなさい」

「覚えが、あります」

「お前が、提灯を打ち落したのか」

「左様です」

「何故、そんな事を、したのか」

「代官の下役が、わたしを、抱き上げて、道側へ片寄せたから、その仕返しを、してやつたのです」

「えツ、仕返しを……………」

「ハイ」

之には、政之丞も驚いた。

「と、と、とんでもないことを、したのう」

「悪いのですか」

「……………」

「その上に、お前は、逃げたといふでは、ないか」

「……………」

「悪いと思はぬものならば、何故逃げたか」

平八郎は、ちツと、考へ込んで居る。

四

「どうも、致方がないから、わしは、これから謝罪にゆくが、代官の方で、謝罪を肯容れぬ時は、お前を、引渡す事に、ならう」

と、政之丞は、力無げにいふた。

「提灯を打落したのは、そんなに、悪い事なのですか」

「悪い」

「何故ですか」

「代官の提灯ばかりではない。すべて、御用提灯に、無禮を加へれば、その罪は重いのぢや」

「それだから、謝罪のですか」

「左様ぢや」

「謝罪つてもいけない、といふたら、どうなるのです」

「お前の身柄を、引渡すことにならう」

「引渡されると、どうなるのですか」

「斬られるかも、知れぬ」

「お祖父さま」

「何ぢや」

「謝罪のは、お止なさいよ」

「謝罪のは止せ、といふのか」

「ハイ」

「どう爲る、つもりか」

「斬られた方が、いゝてせう」

「斬られる氣か」

「ハイ」

「それほどに、謝罪のは厭か」

「ハイ」

政之丞は、頗る困つた。

けれども、悪い氣はしなかつた。いかにも、武士の子らしい、キビ／＼した氣性を、斯うはツきりと出されては、叱言を、いふこともならぬ。

「よし。それでは、是れから行つて来る」

「どこへ、行くのですか」

「代官屋敷へ行くのぢや」

「謝罪に、行くのですか」

「左様ではない」

「左様でなければ、何しに行くのですか」

「掛合に、行くのぢや」

「それならば、行かないでもいゝてせう」

「掛合に行くには及ばぬ、といふのか」

「ハイ」
「何故か」
「向ふから来るのを待つて居て、掛合つたらいゝぢやありませんか」
「ふふーむ」

どこまでも、大膽で、少しも子供らしくない。政之丞は、少し恐ろしくなつて来た。掛合に行くのだ、といつて居ても、實に謝罪に行くのである。平八郎の勢ひが、あまり強いので、謝罪に行くといひかねて、掛合に行くのだ、といつてしまつたのだ。先方から来るのを待つて、談判に應じよう、といふて、平八郎は、飽迄も頑張るつもりに、違ひない。斯うなると政之丞は、年甲斐もなく、孫に引ずられて、ツイその氣になつてしまつた。

代官からは、嚴しい掛合があつた。
「御用提灯を打落した、平八郎は、御引渡ししたしても可いが、幼ない子供に、御用提灯を打落されたとなつては、代官といふ御役目に對して、篠山氏の面目は立つまい、と思ふ。平八郎のいふところに依れば、長い竿を持つて、遊んで居たはづみに、提灯へ、竿の先が觸れたのである、と申して居りますが、左様ではないのでせうか」と、政之丞の答辯は、頗る巧いものであつた。

斯ういふ風に出られては、代官の方でも、甚だ困つた。よく考へて見れば、政之丞のいふ通り、代官が出役中に、御用提灯を、子供に打落された、となれば、自分の責任にもなる。何しろ對手が、十歳未満の子供丈けに、始末が悪かつた。

此事件は、代官の方で、終に泣寝入にしてしまつた。平八郎の幼時には、これに類したことが、いくらもあつて、政之丞は、平八郎の生長を樂しみ、將來に囑望して居た

のである。
與力見習に出た時分から、武藝の必要を感じて、柴田勘兵衛の門に入つた。此人は、佐分利流の槍術の達人であつて、人物も、非常にすぐれて居た。
平八郎が、本格の與力になつて、別に、私塾を開いた時分には、さかんに槍術を傳へて、關西第一の名聲を博したのは、柴田の仕込であつた。
西宮勤番中に、平八郎が、寶藏院流の師範を、して居るものと、試合をして打勝つたので、それを柴田へ報告すると、却て柴田は、平八郎を戒めて「妄りに技を誇るやうでは、お前の將來も、もう行留りである」と、いふてよこした。

之れに對して、平八郎が、詫書を送つて居る。それから努めて、腕を揮はず、深く慎んで居た、といふ事である。

五

江戸の町奉行は、南北に分かれて居たが、大阪の町奉行は、東西に設けられてあつた。奉行下の與力は、三十騎に限られて、部下の同心は、五十人となつて居た。奉行は、幕府の命に依つて、交代する事に、なつて居たが、與力と同心は、居付といふことになつて居て、御抱へ席であつた。

表面は、一代限りになつて居て、伴が跡をつくと、親は、願の通り御暇下さると、いふことになり、伴は、番代申付ける、といふ達しをうけて、職に就くのであるから、御譜代席とは、その點に於て、格式が違つて居た。

與力は、五百坪の屋敷地を與へられ、同心は、二百坪であつた。天滿及川崎に、その屋敷はあつたのだが、一般に天滿與力と呼んで居た。

大鹽の屋敷は、天滿橋筋長柄町を、東へ入つて、角から二軒目の南側で、四軒屋敷の一つで、あつた。

與力の長男は、十五歳になると、御番方見習といつて、役所へ詰める事に、なつて居た。それから先は、本人の働き次第で、相當に役をつけられるのが、例になつて居た。平八郎が、十四歳から詰めた、といふのは、規則の上からであつたが、それにしても、秀才であつたことは、動かし難い。

十五歳と十四歳では、一つ違ふが、その頃の人の歳は、一つや二つ、時と場合に依つて違ふのであるから、何の不思議もない。

在職は、十三年の長きに涉つて居るが、重い役付には、ならなかつた。神社役、川役、地方役といふのが、奉行附の三役であつたけれど、それにさへ、なれなかつた。

在職中の功績としては、第一が、耶蘇退治を、やつた事である。第二が、役人の奸曲を暴いて、懲した事である。第三が生臭坊主處分の事であつた。

當時の奉行は、高井山城守といふ人で、よく平八郎の氣性を呑込み、充分に、其腕を揮はせたので、平八郎も、山城守の知遇に感じて、一身の榮達など、少しも考へず、思ふさま、遣つて退けた。

その遣口は、頗る峻烈を極めたので、奸曲の輩は、縮み上つて、市井の無頼漢は勿論、不正の役人までが、平八郎を恐れて、何事も控目になつたから、良民の喜びは、非常なものであつた。

自分は、東の町奉行に、仕へて居るにも不拘、西の町奉行に屬する、與力の弓削新右衛門の私曲を許して、終に詰腹を切らせた上、その手下になつて、悪事を働いた、天満の作兵衛、鳶田の久右衛門、千日の吉五郎、新町の八百新等を悉く處分してしまつた。

新右衛門は、與力中の古參で、その勢力は、遙に奉行の上に在り、何人も、手を付け得なかつた、ほどであるのを、支配違ひの平八郎が、手を入れて、悪い奴等を、一掃し去つたのは、流石であつた。

『我、心之れを知る。而も主客、勢懸て、苟媮傍觀し、吏良ありと雖、衆寡敵せずして、浮沈容を取る而已』

『子起の始めて密命を受くるや、自ら度るに、事濟らば國を補ひ、濟らずんば家を破らん。家に一妾あり、之れを出して、累無からしめ、然る後、籌を運らし、策を決し、親信を指顧し、發摘意外に出ず、其封家長蛇たる者を斃し、首を駢べて、戮に就き、内外股栗す』

と、斯う書いてある位だ。

併し、平八郎が、それ迄に、腕を揮つたのも、畢竟は、山城守が居たからで、普通の奉行には、平八郎を、使ひ得ないし、また平八郎も、山城守の知遇に感じたればこそ、偉大な功績を、擧げたのであつた。

『職は、即ち微賤にして、而も言聽かれ計行はる。大政に關り、衝憲を除き、民害を鋤き、僧風を規す。豈千載の一遇に非ずや』

と、平八郎も、いつて居る位だ。

天保元年七月、山城守は、職を罷めて、江戸へ歸つた。それと同時に、平八郎も、職を退いて、隱居して居る。家督は、養子の格之助が、襲ぐ事になつた。

昨夜閒廳夢始靜 今朝心地似三僊家、 誰知未乏素交者、 秋菊東籬潔白花

是れは、その際に詠んだ、詩である。

當時、平八郎の齡、未だ四十歳を越えず、盛名隆々たる時の辭職であるから、種々の批評もあつたが、例の山陽は、左の如く言ふて居る。

『野人頼襄あり、獨り曰く、子起固より當に然る可し。然るに非ずんば以て、子起と爲すに足らず。吾知る、彼其心壯にして身羸、才通じて志介なり、功名富貴を喜ぶ者にあらず、喜ぶ所は、間に處し書を讀むにあり。吾嘗て、其精明を過用し、銳進折れ易きを戒む、子起深く之を納れたり。而も止むを得ずして起ち、國家の爲に奮つて身を

願ざるのみ。然らずんば、安ぞ能く壯強の年、衆望翁屬の時に方り、權勢を奪去して、毫も願戀なからんや。唯然り、故に其任用せらるゝに當り、請託を呵斥し、苞苴を鞭撻し、凜然之を望む者をして、寒氷烈日の如くならしめ、以て此效を成すを得たり。故に子起を觀るは、其敏に於てせずして其廉に於てし、其精勤に於てせずして、其勇退に於てすべし、聽く者以て然りと爲す』

六

重藏が、大阪へ赴任したのは、文政二年であるから、齡は、三十歳を出たばかりで、精氣壯の時であつた。平八郎の齡は、判然して居ない。生れた年月が、實は不明なのであるから、例の事件で、死んだ時を、四十五歳とすれば、是も重藏と同じやうに、三十歳位の時で、どちらも、油の乗り切つて居る、働き盛りの年頃であつた。重藏は、江戸の與力の家に生れ、平八郎も、大阪の與力の家に生れたのであるから、不思議の廻り合せてあつた。兩人共に、學問には精通して、その氣性も、頗る似通つて居たが、重藏の方は、與力として働いたことはなく、平八郎の如く、その點に於ての盛名は、なかつた代りに、北邊防備に、關する意見と、蝦夷地の探險には、先覺者として知られ、蝦夷の北端に、近藤岬なるものを、残した男であるから、平八郎とは、行く道を異にして、與力中の變り物、とされてあつた。

今のやうに、新聞が無いので、くはしいことは判らないにしても、同じ與力の事であるから、互ひに其噂は聞いて居るので、その爲人も、大概は、知つて居たのだ。

大阪へ、來てからの重藏は、不平が手傳つて、平生の傲岸自尊は、一層ひどくなつて、それが爲めに、親しい交友も出來ず、閑居して讀書に、日を送るの外なかつた。

今日は、大鹽平八郎が、訪ねて來て、せひ逢ひ度い、といふので、客室へ通させたが、丁度しらべ物をして居て、

興味の乗つた時であるから、長く待たせて置くと、客室の方に當つて、恐ろしい響きがして、書齋の障子までが、ピリピリツと鳴つた。

免れて居た机から、身を起して、四邊を見廻した重藏は、ニヤリと笑つて、立上つた。はげしい足音が聞えて、家來の二三子が、慌たゞしくやつて來た。

「ハツ、申上げます」

「何事か」

「只今、お客室の大鹽殿が、鐵砲を打ちましたので、一應は咎めましたが、さらに頓着なく、またく打たう、といたしますので、やうやくに抑へましたが、いかゞいたしましたませうか」

「客人の打つた、鐵砲の響きであつたか、ハツハ、、、」

何が可笑しいか、重藏は、聲を出して笑つた。平八郎は、長くまたせられたが、さらに、重藏の姿は見えず、凡そ一刻あまりは經つたであらう。元來が、疝癩の強い男で、傲岸の點は、重藏に負けぬほどであつたから、可成り怒つて居るのだが、この儘歸つては、自分の負けになるから、どうせ待たせられるものなら、何時までも、待つて居よう、と、腹は据ゑたが、あまりの退屈に、ゴロリと横になつて、一と寝入りするつもりで、不圖、床の間に眼がつくと、其處には、百目砲が、寄せかけあつて、硝薬も、傍らに添へてあつたので、急に立上り、床の前へ來て、その鐵砲を、取つて見た。

手入れも、充分にしてあるばかりでなく、よほどの上物であるから、やがて、硝薬を仕込み、それを掲げて、廊下へ出ると、庭の立木を臨んで、一發放つたのである。

轟然たる音響と共に、硝煙は、室内に漲り、的になつた立木へ、彈は、美事に命中つたので、それから重藏の家來が、さわぎ出したのである。

二發目を放たう、と爲るのを、一同が、泣付くやうにして、留めるから、打つことは止めて、筒の掃除をはじめた。その際に、重藏の書齋へ、訴へて来たのだつた。

平八郎は、筒の掃除を終り、之れを床の上へ置いたところへ、左手に、煙草盆をさげ乍ら、右手に煙管を持つて、ぬつと、はいつて来たのが、重藏であつた。

互ひに、顔を見合せたが、何の詞もなく、重藏は、席について、平八郎を、ぢつと見た。

『二發の御手並、感服いたしました』

『あまりの退屈に、ほんの閑潰し、とんだ悪戯をいたした。御ゆるし下さい』

『ハツハ、、、、打つ爲めの鐵砲、別に、不思議も御座るまい』

いくら、打つ爲めの鐵砲でも、人の家へ来て、こんな事をしては悪からう。それを咎めずに、却つて賞讃したのは、さすがに重藏である。

かねて命じたものか、すぐに酒肴が運ばれた。平八郎の前へは、一つの小鍋が出された。その蓋が、ムク／＼動いて居るのは、どういふ譯か。

『御遠慮なく……』

平八郎は、鍋の蓋を取ると、スツポンが、這ひ出した。

重藏は、平八郎の容子を、ぢつと見詰めて居た。

這ひ出した、スツポンを、左の手で、ぐつと抑へつけ、鍋の中へ入れると、小柄を取つて、その首を切つた。同時に、甲を剝いて、生血を盃にうけて、先づ自分が呑乾してから、その盃を、重藏へ指して、

『足下も、呑まれるか』

と、いつた。

七

その盃を取つて、重藏も、一と口に呑んだ。スツポンの生血の呑分けなどは、ちよつと面白い。

落ちついて、話合つて見ると、同じやうな氣性の兩雄であるから、この初對面で、肝膽相照す交はりになつた。

それから、といふものは、互ひに往來して、交情は、日の經つに従ひ、深くなつてゆく。

どちらにも、學者肌の人物であり、狷介にして、多く人と容れず、會を友を得れば、骨肉の如くなる。殊に、幕府の措置に、不満を抱き、時世に慍らぬ同志であるから、その談論するところの、よく折合ふのは、當然であつた。

自分の志でない、弓奉行にされたのは、此上もなき、恥辱として、考へて居るのであつたが、幕府にも、自分を、能く知つてくれる人も、あるのだから、そのうちには、浮び上る時もあると、ひそかに楽しんで居たが、さらに左様した機會は來らず、只だ徒らに、星霜の經つばかりであつた。自分の體には、何の動きも、ないやうに思はれて、左なきだに、疝癖の強い、重藏の氣は、しきりに焦々として、事毎に不平が、高まるばかりであつた。

城代始め、幕府から、廻つて居る、在阪の役人は、すべて姑息な奴ばかりで、重藏の話對手になりさうなものは、只の一人もなかつた。獨り平八郎のみが、自分の心を、よく知つて居るやうに、思はれるから、平八郎には、しばしば逢つて、話す機會はつくるが、さて逢つて視ると、平八郎も、自分と同じやうに、矢張り當世に、不平を抱いて居る男であるから、却て、重藏の心を、刺激することが多く、話合つて居るうちは、愉快でも、別れて後は、いよく不平が募つて、家人に迄、當り散らす事が、殆んど常例の如く、なつて來た。

急に思ひ立つて、庭内の一隅に、大きい工事を起した。家人も、初めのうちは、離れ座敷でも、つくるものと思つて、氣にも留めずに居たが、いよく足場をかけて、大きい材木を、組立てるのを見るとき、それが、火の見櫓の如きものであるから、さすがに用人の小暮作兵衛が、それと氣が付いて、非常に心配を始めた。

一士人が、其筋の允許を得ず、物見臺に、ひとしき槽を、つくることは、堅い禁制になつて居るのであるから、用人の心配は、決して無理のない事であつた。

其處で、作兵衛は、いくたびか、意見もして見たが、重藏は、さらに頓着なく、工事を進めてゆくのであつた。

「萬一にも、公儀より御咎めのありました場合には、何と申譯を遊ばす、この上の工事は、御中止の儀、ひとへに願ひ上げます」

作兵衛は、先代右膳からの家來で、重藏の氣性は、よく判つて居るが、近藤家の一大事と思つて、涙ながらに、意見を爲るのであつた。

「お前の心配は、わしにも、よく解つて居る。併し、わしには、相當の考へがあつて、爲る事であるから、決して、心配するには及ばぬ。公儀からの咎めがあれば、立派に、申譯を、いたすつもりである」

と、いつて、さらに取合はず、工事は、いよく進むのであつた。

出来上つたのは、高さ數十丈の高槽である。これに登れば、市中は、一眸のうちに集まる、といふ立派なもので、誰れも、彼れも、これには驚嘆して、その傍若無人の振舞に、舌を捲かぬものはなかつた。

平八郎は、この事を聞くと、ひそかに配下のものをして、檢分させ、その報告を得て、非常に驚いた。

すぐに、重藏を訊ねて、

「貴下にも、似合はぬ、何といふ失態である。斯かることに依つて、嚴譴をうけるとなれば、御役御免は勿論、或は家名にも、及ぶかも知計り難い。速に取除いて、後患を、未前に防がねば、やがて、一大事に相成るであらう。未だ

城代よりは、何の照會もないのが、何よりの仕合であるから、拙者の申す通りになさるやう、希望いたします」

「御親切の御注意は、まことに感謝に堪へぬが、拙者にも、多少の考へがある。此一事は、何人の勸告も肯かぬ、つもりである。要するに、一個の高槽、それに何程の御咎めのある筈もない。足下も、一度登つて見られたら、いかゞ

て御座る」

終に、平八郎の忠告も、しりぞけてしまつた。

「好漢惜む可し。只徒らに、氣を負ふことの高くして、時流と合はず、この調子では、終に一身を誤るに至るであらう」

と、ひそかに嘆息したが、その平八郎も、矢張り後には、重藏と同じやうに、上司と争つて、身を亡滅したのである

から、不思議の對照といふ可きである。

著者曰、之れ迄書いて來ると、定めの紙數が盡きてしまつた。残念ながら茲迄を前編として止め、その殘稿は、暗殺史と合して出す事に爲る。

一、近藤重藏及最上徳内の終焉迄

一、高田屋嘉兵衛のイルクツク拘禁顛末、及日露關係の葛藤

一、間宮林蔵、松田傳十郎の轡韁入

以上は、後編の大綱目であるが、細目は多岐に涉つて居るから、略之。

昭和四年五月十日印刷
昭和四年五月十五日發行

伊藤痴遊全集 第十一卷



(品質辨)

著者 伊藤仁太郎

發行者 下中彌三郎

印刷者 瀧川 薫

東京市麹町區下六番町一〇

東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番
株式會社

平

凡

社

電話九段 三三一
六四六
四七六
七五四
番番番

本製堂慶昇

行印社會式株刷印同共

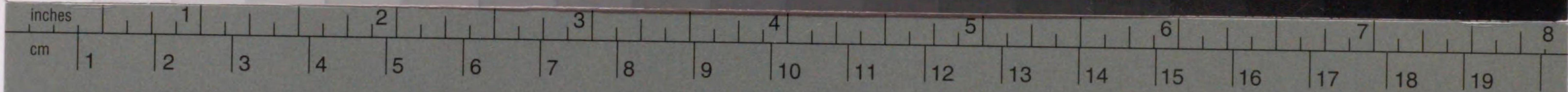
560
42

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

